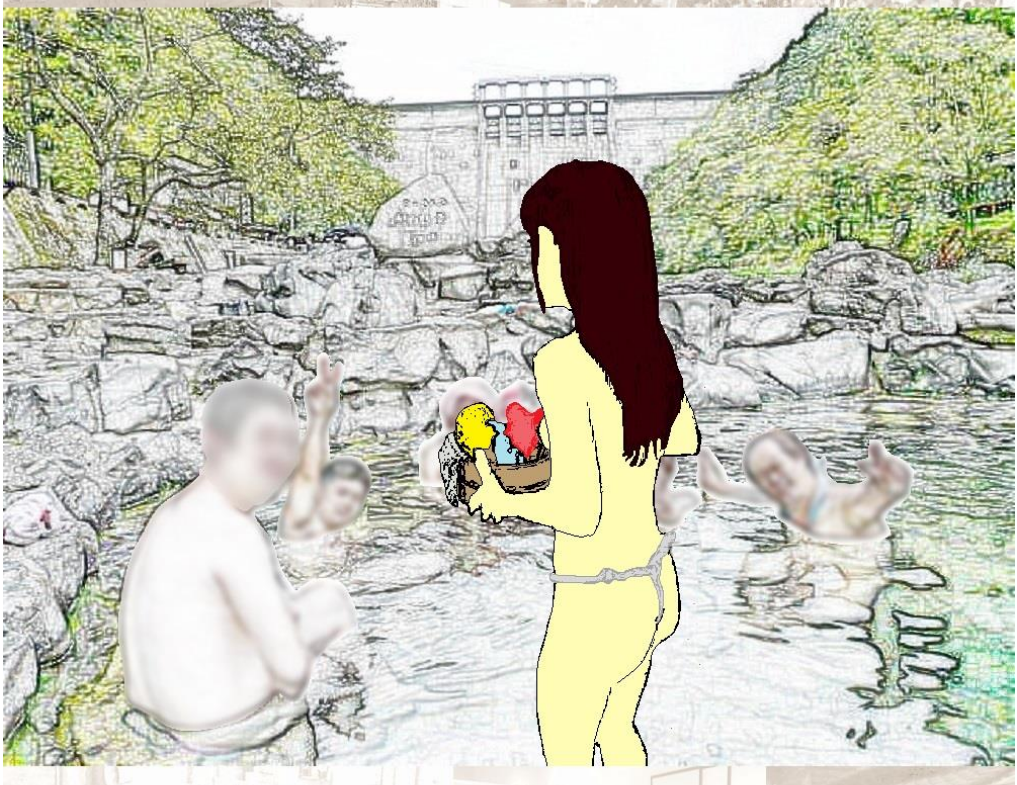
昭和集団羞辱史

浴場編

湯　女
トルコ嬢



濠門長恭

巻頭言

すでに半世紀の昔。「もはや戦後ではない」と経済白書が宣言した昭和三十一年。所得倍増計画が発表された昭和三十五年。時代は高度経済成長に突入していた。

進学率が半数に達していなかった当時、停滞する一次産業地域の新卒者の多くは、急成長を続ける工業と商業へと、就職していった。地方から大都市へ新卒者を運ぶ『集団就職列車』が仕立てられたほどだった。

しかし。華やかで豊かな生活への憧れと希望とを胸に巣立つ若者たちばかりではなかった。意に染まぬものの、さまざまな事情で、性の汚濁に身を投げ込まざるを得なかった少年少女もいた。

このシリーズでは、高度経済成長の影で泣いた――主として少女たちの足跡を追ってみたいと思う。

なお、本シリーズでは、昭和三十年代に普通に使われていた名称を敢えて使い、現代風には書き換えない。トルコ風呂がソープランドに名前を変えるのは昭和六十年になってからであるし、昭和五十年代後半までニューハーフという言葉は知られていなかった。ビジネスガールは娼売女の意味を持たなかった。

時代劇の中で軍隊とか経済など、当時には無かった単語に違和感を覚えるのと同じ理由で、筆者は右の方針を採るものである。現代では差別語とされるものも（不自然でない言い替えが可能なものを除き）使用する場合がある。

本シリーズの設定は、作者の少年時代の記憶を土台にして、あるいは時間軸をずらし、またはネットで得た知識に基づいて想像や虚構を大幅に交えたものであるが、登場する人物・年齢・団体・地名などはすべてフィクションである。また特定の思想などを賛美もしくは誹謗するものでもない。

目次

巻頭言……1
目次……3
湯女……4
継父と混浴……4
母親の斡旋……8
奔放な新人……24
桃色の暴走……48
先輩の虐め……66
淫惨な仕置……88
母親も湯女……97
トルコ嬢
処女蹂躙
偽装結婚
新人研修
自腹接客
SM折檻
痛悦馴致
逮捕寸劇
私刑宣告
後書き

湯女

現代でも、ごく一部の温泉宿には湯女が実在する。ただし、湯浴み着などを着用して、ほんとうに男の上半身を洗うだけである。性的サービスの部分は、ピンクコンパニオンが受け持っているのが実情である。

しかし。さびれた温泉地が起死回生の秘策として性的サービスを伴なう湯女を復活させるということは、情報の拡散が瞬時になり風俗への取り締まりが格段に凶化された現在ではともかく、半世紀の昔には有り得たかもしれない。

温泉の経営者が江戸風俗を知らなくても、都会のトルコ風呂から着想を得るということは、おおいに考えられる。

継父と混浴

「お父さん、お風呂わいたよ」

梢枝が告げると、父が夕刊をたたんで立ち上がった。
「先にはいってるぞ」
「はあい」
梢枝は整理箪笥から父の下着と自分の下着とを取り出した。三年前に弟が生まれてからは、父の身の回りの世話は主に彼女がするようになっていた。
父が湯船に浸かる頃合いを見計らって、梢枝も風呂場に向かった。もうすぐ三歳になる洋一の相手をしながら娘を見送る母の目に微妙なかぎろいが浮かんだのに、梢枝は今夜も気づかなかった。
脱衣籠の中の父の下着を洗濯籠に入れて、新しい下着と交換する。棚から二つ目の脱衣籠を取り出して――梢枝も服を脱ぎ始めた。
以前は週三回の入浴日ごとに組み合わせが違っていたが、今では父と梢枝、母と洋一の順番に定まっている。三番風呂まで使っては薪代がかさむ。
裸になって。梢枝は自分の乳房を見下ろした。去年までは上半分がわずかにえぐれていたけれど、今ではふっくらと丸みを帯びている。ぽつぽつブラジャーをしてみようかなと思ったりする。梢枝はちょっと気取って、髪を手拭いで包んだ。長めのお河童で、先生に叱られない範囲で段を着けている。
「お父さん、はいるよ」
声を掛けてから、曇りガラスの引き戸を開けた。あえて、前は隠さない。隠すのは、そこを意識しているからだ。父親を相手に娘が羞ずかしがるのはおかしい。たとえ、相手が血のつながっていない継父だって同じだ。それに――カマトトぶって羞ずかしがったりし

たら、父も遠慮するかもしれない。
湯船からすこし離れてしゃがんで掛け湯をして、この一年で淡く生えそろった毛を掻き分けるようにして、割れ目の中まで指で洗った。襞の奥に垢を貯めておくと不潔だし、お湯を汚すことにもなると――父に仕込まれている。もちろん、お尻の穴も丹念に洗った。
梢枝が立ち上がると、父は湯船の中で腰を前に滑らせた。
「乗っかるね」
断わってから、梢枝は父に背中をあずけて腰の上に座った。梢枝よりずっと剛い毛が尻にくすぐったい。くすぐったいといえば――梢枝の股間を割ってそそり勃ってくる肉体が割れ目に食い込んできて、これは梢枝を妖しい気分にさせる。勃起は物理的な刺激で起きる生理現象だと、二年前に父から教わった。
「それだけ、梢枝が重くなってきたんだよ」
「やだ。コズエ、太ってなんかないよお」
わざと舌足らずな言い方をしたけれど、そのときから梢枝は、父の中に男性を意識している。肉体の急激な変化は物理的な刺激が無くても起きるのだとも、とっくに気づいている。それでも一緒にお風呂にはいるのは、薪代の節約だけではない。
「お尻もずいぶんと丸くなってきたね」
父の両手が尻をなぞる。
「……」
くすぐったいのをこらえて、梢枝は口を閉ざしている。子供っぽく笑ったりすると、父が悪戯を中断してしまうからだ。居間にいる母に声を聞かれるのも心配だった。黙ったま

ま、わずかに尻をくねらせた。父の行為を受け容れて快感を感じているという意思表示だった。

父の指が鼠蹊部をなぞって淫埠を掌で包み込んだ。親指で丸みをなぞりながら、中指が淫裂の頂点から包皮に埋もれた蕾を掘り起こして――裏側からくすぐる。そこに疼きが生じて固くしこっていくのが、自分でわかる。

「く……んんん」

鼻に抜ける吐息が甘く震えるのまではおさえられない。そして、こういう反応が父を興奮させることも、梢枝は経験で知っている。

父の左手が腹をなぞって乳房に達した。乳房を撫で、下から持ち上げるようにしてやさしく揉んでくれる。すでに充血している乳首が、ますますとんがっていく。そこをチョンッと摘まれて。

「んんんん、んん……」

大きな声にならないよう、梢枝は歯を食いしばった。

父の腰で尻を突き上げられて――まるで自分の股間からそそり勃っているような父の肉体を両手で握った。自分への刺激に合わせて、柔らかくしごく。

頭も腰も痺れてきて、梢枝は自分が宙に漂っているように感じている。

「くううんんん……」

もうちょっとで背筋を熱い波が走り抜ける。そこまで達したとき、ふいに父が身体の位置を入れ替えて中腰になった。目の前に突きつけられた怒張を、梢枝は口にふくんだ。と同時に、喉の奥に熱い衝撃を感じた。

「んぶっ……！」
葉子は頭を引いて父からのがれて。口中に放出された汁を飲み込んだ。二年前にフェラチオを教えられてからずっと、そういうふうに躾けられている。
「ちぇええ……負けちゃった」
絶頂の寸前で放り出された不満と、秘密の悪戯の後の羞ずかしさとを、照れ隠しの笑いに紛らわせた。
湯船から出て身体を洗い始めた父の背中を眺めながら。今日はもう身体を洗ってくれないだろうなと、ますます欲求不満を募らせる梢枝だった。

母親の斡旋

卒業まで半年を切ると、学校単位や地区単位で就職相談会が催されるようになった。全国平均では進学率が五割に達していたが、農村部ではせいぜい二割から三割。長男は親の後を継ぐし、家事手伝いをしながら縁談を待つ少女もいるが、卒業生の半数は遠隔の地へ就職していく。雑貨商（ヨロズ金物屋）を営む継父は、まだ四十二歳。幼児の息子が成長して家業を継ぐのを待つ時間がある。小規模な商いだから、梢枝が手伝うまでもない。そうなると就職しか道は無い。継父は梢枝の進路に気をもんでいたが、実母には何か考えがあるらしく、梢枝を就職相談会には参加させなかった。そうして、冬休みが近づいた頃に

なって、汽車で二駅先の学校まで梢枝を連れて行った。
『困窮子女応援特別相談会』そんなポスターが正門の脇に貼られていた。
会場にあてられた教室には、きちんと背広を着た中年男性が二人、長机の前に座っていた。中央に座った男の前に置かれた即席の席札には『即日採用社特別周旋課長　林』と書かれていた。梢枝と同じ名字だが、もちろん赤の他人だ。右端の男の前には『立会　本校教頭　田原』の席札。
母が周旋課長の正面に座って、隣に梢枝を引き据えた（そんな感じだった）。
「この子は、男の人と一緒にお風呂に入るのが好きなんですよ」
いきなり切り出した母の声を聞いて、梢枝は頭が真っ白になった。やっぱり、ばれていた。母は、たんに継父と一緒に入浴していたことを言っているのではない。秘密の悪戯にも気づいていたんだ。そうでなければ、この場で持ち出すはずがない。動転した梢枝の耳には、母と周旋課長とのやり取りは素通りしていた。
「そういう仕事があれば、この子も喜んで働くと思いますけど」
「そうですねえ。トルコ風呂か温泉地の湯女あたりが適していますかな。どちらも大卒のサラリーマンの何倍も稼げますよ。もちろん、破格の給料に見合う業務に就いてもらうわけですが」
「つまりは、身体を売るということですね」
「いや、まあ、絶対にそうだとも限らないわけでして。手を使って奉仕とか、太いソーセージを食べるとか……」
「それでしたら、大丈夫ですわ。この子、私の再婚相手のソーセージが大好物なんですか

ら」
ぶほっ……と、教頭がむせた。林課長も、あらためて梢枝の容姿を値踏みする目で眺めている。梢枝本人は――動転に幾許かの狼狽が重なっただけ。
学校によっては風紀指導されかねない髪型をしているが、それ以外は派手なところもない少女。眉は太いが、それは手入れをしていないというだけ。まぶたは一重だがすっきりしている。小ぶりな丸っこい鼻を団子鼻と見るか愛らしいと感じるかは、男の好み次第だろう。こんな口で太いソーセージを頬張れるのかと疑う唇だが、そういう目で見ると、肉厚でセクシーと評せないこともない。制服の上からでも、身体はじゅうぶんに発育しているのがわかる。幾分かはぽっちゃりしているが、この年齢の少女が理想のプロポーションをしていたら、むしろ不気味だ。男の手に揉まれ男の上で腰を振っているうちに、引き締まってくる。
林課長は、大きくうなずいた。
「このお子さんなら、どこの店でも大歓迎でしょう。求人が来ているのは……」
「トルコ風呂というのは大都会にあるのでしょう」
母が言葉をかぶせた。
「大都会とは限りませんが……歓楽街ではありますね」
「そういった環境には染まりやすい子です。先ほど、温泉地とおっしゃっていましたわね」
「湯女ですか。実は、こっちの求人は一件だけでして。最近のレジャーブームで客を有名な温泉地に取られて、なんとか立て直そうとして三年前から女性を置くようになったのですよ」

まだ広くは知られていないが(有名になっても痛し痒し――と、林課長が苦笑を交えた)、赤線の廃止が追い風になって、着実に特定の男性客は増えてきている。新たに土産物屋が店を開いたとも付け加えた。

「そちらのほうが、あれこれの誘惑が少なそうですわね。そこに決めます。いいわね、梢枝」

叱りつけられるように言われて、びくっと梢枝は身をすくめた。

横に座っているのは母ではないと――未だ修羅場を知らない少女にも、それがわかった。隣に座っているのは、嫉妬に身を焦がしながら自分の夫から浮気相手を引き離そうとしている三十過ぎの年増女だった。

「はい……よろしくお願いします」

そう答えなければどうなるか見当がつかなかったけれど、家にいられなくなるのは確実だ。それなら――母に留飲を下げてもらい、うんと稼げる仕事に就くほうが、ずっと良かった。

どうせ、話はオブラートに包まれているんだろう。お金のことではない。母が身体を売る仕事かと尋ねたとき、課長さんは「絶対にそうだとも限らない」なんて言い方をしていた。それくらいには、梢枝も話を聞いていた。

たとえそうでもかまわない。これまでも継父と入浴しているとき、そんな気配を感じたこともある。実現しなかったのは、家の中に母が居たからに過ぎない。村の婦人会かなにかで母が何時間も家を空けるときは、きっとあるだろうし――それを梢枝は恐れていたのか待ち望んでいたのか、自分でもわからない。相手が継父でなく見知らぬ男に変わるだけ

のことだ。ずいぶんと大違いの『だけ』ではあるけれど。
「いやあ、これほどに保護者が熱心で本人も乗り気でいてくれると、周旋する側も張り切ってしまいますよ」
皮肉の響きは、まったくなかった。林課長も具体的な事例を挙げたりはしなかったが、梢枝にもおよその情景が目に浮かんだ。
映画でも、お女郎さんに身売りするというのは悲劇だ。一家を養うために、それとも借金のカタに、あるいは梢枝のように親に疎まれて――泣く泣く女衒に買われていくというのがお決まりの筋立てだ。
母の心情はともかく、梢枝自身は湯女だろうと女郎だろうと、悲劇とは思っていない。貞操堅固に暮らして、身の丈に合った（ということは、近在の農家か都会でサラリーマンになっている先輩あたりと）結婚をして。家事と子育てに追われて、肩凝りのサロンパスなんかを貼った小母さんになってしまうよりも。女の武器を存分に使って、でも堅実にお金を貯めて、武器がガタついてきたらさっさと小洒落た居抜きのお店でも買って女主人に収まって。結婚なんて、母くらいの歳になってから考えても遅くはない。いっそ、若い燕でも囲っちゃおうか。
動転から立ち直った梢枝は、年齢のわりには夢も希望もないこと（それとも、途方もない野望というべきか）を考えるのだった。
話がまとまったとはいうが、条件が曖昧な部分も少なくはない。
支度金を五万円支払う。ただし、五年以内に辞めるときは全額を返済する。女中部屋に住み込みで三食付き。週に一日の休日と三日間の生理休暇。給料は歩合制で最低額の補償

はあるが雀の涙。参考までに、現在四人いる湯女の平均手取り額は三万円だと、林課長が求人先の資料に目を通しながら説明してくれた。
「ソーセージは食べなきゃならんですが、どっちの口で食べるかはお客との交渉らしいですね」
すでに梢枝は、客の求めに応じる覚悟は決めていた。

父は、葉子が湯女に就職することについては何も言わなかった。あるいは、前もって母から因果を含められていたのかもしれない。
それからも、一家四人の生活は平穏に過ぎていった。風呂の順番だけが、一番風呂が父、二番目が梢枝、最後が母と弟に変わったことくらいだった。五万円は将来の改築に備えて、新規に作った父名義の口座に入れられた。梢枝としては、もちろん面白くない。
卒業式が迫って周辺が慌ただしくなってきた二月のある日。梢枝は父にねだって、街へよそ行きの服を買いに連れて行ってもらった。
「俺には女の子の服なんてわからんぞ」
「でも、財布を握ってるのはお父さんでしょ。あとで目玉を飛び出されたら困るもの」
母の前でわざと父の背中に抱きつきながら、皮肉っぽく付け足す。
「支度金は改築費用にまわしたんだもの。お洋服もだけど、餞別くらいはほしいな」
言外の意味を込めて、梢枝は母に挑発的な視線を向けた。
母は女の目で娘をにらんだが――ふっと息を吐いた。
「これから五年間は会えなくなるんだものね」

父はきょとんとしているだけだった。
――なので、日曜日に父娘でデパートへ行って。そこからの運びが手間取った。
「ねえ。約束してくれた餞別だけど」
「なにか約束していたかな？」
わかってくれてない。梢枝は強行突破でいくことにした。
「湯女ってね、男の人の身体を洗うだけじゃないよ。お父さんとみたいなこともするんだよ」
「う、うむ……」
「就職斡旋会社の人は、ソーセージを食べるって言い方をしたけど……コズエ、上のお口でしか食べたことないの、知ってるでしょ」
「……」
「だから、お餞別ていうか。お父さんに食べ方を教えてほしいんだ」
さすがに、言葉を像作（かたち）るのには羞恥があった。
「いや、しかし……」
「母さんも言ってたじゃない。五年間は会えないって。それでも、教えてくれないの？」
「いや、しかし……」
父親があたりを見回す。デパートのほかにも食堂から宝飾店まで雑然と入り乱れているが、ホテルや旅館の看板は見当たらない。
「裏通りのほうには、休憩所みたいなところもあるって、聞いたことあるよ」
この十年。少女向けの雑誌は老舗が次々と廃刊される一方で、より刺激的な内容ものが

登場してきている。婦人雑誌も『開放的』な記事が増えている。連れ込み宿とか温泉マークを、都会に住む少女なら知っているだけでなく実践している者もいるだろう。

義理の娘にけしかけられても、父親はまごつくばかりで動こうとしない。

「気分が悪くなったんで、静かな部屋で何時間か休みたいんです。そういう場所を知りませんか？」

垢抜けた服装の若い男を選んで尋ねた。

男は梢枝を見て、後ろに突っ立っている父の姿に気づく。

「二つ先の角を左へ折れて三十メートルくらいで『新平和街』ってアーケードがある。その裏に軒を連ねてるぜ。こういうことは初めてかい？」

質問は無視して、梢枝は丁寧に礼を述べた。

「親父（おや）っさん。小娘に引かれて連れ込み宿参りかよ。ボラれるんじゃねえぞ」

旅の恥は掻き捨て――若者の駄洒落（牛に引かれて善光寺参りのもじり）のせいか、そんな諺を梢枝は思い出した。

最初に見つけた旅館に、これも梢枝が父の手を引っ張るようにして入った。衝立の奥から顔を出した受付の老婆は、きな臭い顔で二人を見比べていたが、詮索めいたことは言わずに前払いと引き換えに部屋の内鍵を渡してくれた。十三歳未満でさえなければ咎められることのない時代だった。

六畳の洋間にダブルベッドが据えられて、あとは簡素なテーブルと丸椅子が二つ。ベッドすれすれに開くドアの向こうは狭いシャワー室。便所はなかった。

「お父さんからシャワーを使ってね。一緒には入れそうにないけど」

まだためらいを残しながら父が服を脱ぐ片端からひったくってハンガーに掛けて。父の姿が消えてから、梢枝も素裸になった。

「やっちゃった……」

ベッドに腰掛けてつぶやいた。勢いだけで父を連れ込んだものの。みずからの積極的な意志で処女を捨てるとはいえ、不安もあるし感慨もある。耳年増なだけに、破瓜の痛みに怯えてもいる。熱烈な恋愛の末というわけでもない。好奇心と快感とで父の性的な悪戯を受け容れてきた、その延長。そして、売春を実行する前に経験を積んでおきたいという言葉に嘘はない。手ごろな相手となると継父しかいなかったという――成り行きだった。母への対抗心も幾分はあるが、それは不安を増す方向にしかはたらかない。予想外の出血とか、そういった場合に相談できる相手がいないのだから。

それでも。父がシャワー室から出るなり、入れ替わりに飛び込んだ。肝心の部分だけは丹念に洗って、あとは水を浴びもしなかった。まさかとは思うけれど、父が心変わりして逃げ出さないとも限らない。父の衣服をきちんとハンガーに掛け（て、ズボンのベルトを巻きつけたりし）たのも、着替えを手間取らせるためだ。それくらいには冷静に深謀遠慮をこらしている。

バスタオルを裸身に巻き付けて、梢枝はシャワー室を出た。父は浴衣姿で丸椅子に腰かけて煙草を吸っていた。

いよいよだ――梢枝は掛布団を足元まではぐって、ダブルベッドのまん中に仰臥した。

「お父さん……梢枝を女にして」

婦人雑誌の連載小説で覚えた科白。そして、これから婦人雑誌に（曖昧な表現で）書か

れていた事柄が現実に（生々しい形で）起きる。
浴衣を着たまま、父がベッドに腰掛けた。身体をひねって、梢枝のバスタオルを剥ぎ取った。
「すっかり一人前の身体だな。押し返されそうな弾力だ」
おずおずと乳房に手を触れて。あとは、風呂場と変わりない調子で愛撫に取り掛かった。いや、悪戯をしているという雰囲気がなかった。時間の制約がないからだろうか。何度も繰り返して乳房を撫でて乳首をつついて、淫裂をうがって蕾を掘り起こし、くすぐるだけでなくつまんだ。つまんで、中身を滑らすようにして包皮をしごいた。
「ひゃああっ……気持ちいいよお」
母の耳をはばかることなく、梢枝は生まれて初めての嬌声をあげた。一度でも口にしてしまうと、止めどがない。
「うああ……気持ちいい。もっと……乳首もお留守にしないでよお」
梢枝の身体は宙に浮いていた。乳首を転がされ股間の蕾をしごかれると、背筋を熱い波が奔り抜けた。股間が熱く疼いてぐっしょり濡れていくのが自分でわかった。
「挿れて……」
梢枝はうわ言のようにねだった。
「梢枝にセックスのやり方を教えて……」
浴衣を脱いで、父親がおおいかぶさってきた。いつの間にパンツを脱いだのか。風呂場での戯れとは違って、先端が淫裂を掻き分けて突き刺さってくるのを、梢枝ははっきりと感じ取っていた――次の瞬間。

ぐうううっと、淫裂の奥が押し広げられた。
ビキイッと、痛みが弾けた――のだが。
「痛いっ……」
作法（？）どおりに小さな悲鳴をあげもしたけれど。
（あれ？）という思いもあった。
痛かったなあ。今も痛いかな――という程度の痛みだった。そして。ぐううっと押し挿ってくる感触の中には、傷口をくすぐられるような微妙な快感が潜んでいた。
じゅうぶんに濡れていたからだと、梢枝は思った。好奇心が怯えや不安をやわらげてくれて、不必要に緊張していなかったことも大きいのだろう。快感さえあるのは、一年以上も性感を開発されてきたからだろう。
「奥まで挿入（はい）ったぞ」
言われてみると、内臓が押し上げられているような圧迫感があった。満たされるという言葉を、梢枝は思い浮かべた。
「動くぞ」
圧迫感がゆっくりと律動し始めた。膣口なのだろうか、さっきも感じていた傷口をくすぐられるような快感もさざ波を打つ。
なあんだ――というのが、梢枝の偽らざる感想だった。思っていたより、全然痛くなかった。最初から感じるのは無理に決まっているから、かすかなくすぐったさでも上出来なのだろう。あまり痛くなくて、乳首や蕾をいじられるほどの快感もない。これなら『お仕事』も楽に務まりそうだと思った。

父が激しく動き始めると、はっきりした痛みを感じたが――足の小指を柱にぶつけたほども痛くはなかった。
不意に父の動きが止まった。
すこし柔らかくなった肉体が抜き去られるのを感じて、梢枝は拍子抜けした思いだった。
父が避妊処置をしていなかったと気づいたのは、家に帰り着いてからだった。しかし、一週間後に予定よりすこし早く生理が訪れて、それも取り越し苦労に終わった。
――卒業式の三日後に、県外への就職組は教師に引率されて旅立ったが、梢枝だけは即日採用社から迎えが来る三月二十八日を待った。
その日、梢枝は両親に見守られて指定された駅へ向かった。在校生のブラスバンドも近隣の人たちの見送りもない、さびしい門出だった。
父との最後の思い出が残る駅の改札を出ると、先輩くらいにしか見えない若い男性が『即日採用社』の幟を掲げて立っていた。その後ろに三人の女性が立っている。梢枝と同年らしい娘と、いくつか歳上に見える娘。年配の婦人は、どちらかの母親だろう。
二人とも、梢枝と似たような職業に就く。盛大に祝って送り出してもらうのは後ろめたいし、親に見送られるのもなんだか厭だった。でも、ひとりきりというのも心細い。そんなことを考えながら、梢枝は幟のところへ行った。
「お世話になる林梢枝です。よろしくお願いします」
「こちらこそ、よろしく。僕は今里純一といいます」
そうこうするうちに、両親に付き添われた娘が合流して、さらにもう一人が加わって、それで全員がそろった。

大芝加奈、津田佳恵、田端朋子、小島明美、そして林梢枝。あらためて五人が引き合わされたが、誰がどんな職に就くかは紹介されなかった。

五人はそれぞれに準急の切符を手渡されて、あらためて改札を通った。津田佳恵の両親はホームまでついて来て、

「くれぐれも、娘をよろしく頼みます」

しつこいくらいに頭を下げていたが、大芝加奈の母親はさっさと帰って行った。もしも自分の両親が見送りに来ていたら――きっと、ややこしいことになっていただろうと、梢枝は思った。

集団就職で旅立つ者は、泊りがけの旅行に行く人ほどにも荷物を持っていない。所持品は当座の着替えと娯楽用の書籍、もしかしたら日記帳くらいで、生活に必要な細々した日用品は向こうでそろえることになる。梢枝もデパートで買った女物のボストンバッグひとつの旅立ちだった。

加奈を除く三人は、まるでお通夜に臨んでいるかのような雰囲気だった。身体を売ることを本気で厭っているのだろう。年輩の加奈は深刻そうな表情ではないが、なんだか不貞腐れているように見える。楽な仕事でお金をたくさん稼げる。そんなふうに考えている子はひとりもいないと知って、自分の考えは間違っているのだろうかと疑問を抱かないでもなかった。

女子ばかりの就職組と気づいた乗客も、ふつうとは違う雰囲気に戸惑ったのか、話しかけてくる者はいなかった。近づこうとすると、今里がにらむというほどでもないがじっと

見つめてくるのに鼻白んだせいかもしれないが。
今里が買ってくれた駅弁を食べて、夜になって――線路の振動に揺られているうちに、五人はそれぞれに眠りへと引き込まれていった。トンネルに入るときや駅を通過するたびに鳴らされる汽笛が、たまに眠りを破った。
そうして夜が明けて。終着駅に着いたのは午前九時前だった。即日採用社に就職斡旋されたのは梢枝たちだけではなかった。山幡という男に引率された三人が別の汽車で着いて、合わせて八人。
梢枝には温泉旅館からの迎えが来ていて、八人の顔合わせもそこそこに引き渡された。
「急かして悪いが、旅館をほっとくわけにもいかなくてね」
汽車から降りて三十分もしないうちに、また汽車に乗せられた。
「朝ご飯はまだでしょう。夕べの客の残りで悪いが、これを食べなさい」
折詰を渡してくれて、迎えの男も同じ物を広げた。胡麻塩を振った山菜おこわに、茸と小魚の天婦羅。漬物まで地物だと、迎えの男が自慢そうに説明してくれた。
男は雇い主――当地でいちばん大きな温泉旅館『湯乃華』の亭主、武田剛一だった。いちばん大きいといっても、客室は二人部屋と家族部屋を合わせて十五だけ。ほかにめぼしい旅館といえば『仙寿庵』が十部屋と『美人湯』が八部屋。この三軒だけが湯女を何人かずつ抱えている。あとは、せいぜい二部屋か三部屋で夫婦だけで切り回している下宿みたいな宿が四軒。ほんとうに小ぢんまりとした秘湯だ。それくらいは、即日採用社から前もって教えられていた。
従業員は厨房が二人、仲居が三人、下働き（男性）が二人と風呂番の老人が一人。そし

て湯女が四人いるという。明日からは梢枝も加わって五人になる。亭主と女将を加えても総勢十五人。

「湯女さんも手すきのときは仲居さんを手伝ってもらいます。それがあるので、月二千円だけですが基本給を払います」

新前女工の三分の一だ。それは、特別相談会のときに渡された書類に書いてあった。

「本来の仕事についてですが……」

亭主は席から伸びあがってあたりを見回した。平日の朝、大都会から遠ざかる汽車の乗客は少ない。それでも、亭主は声をひそめた。

「お客様ひとりにつき、三十分くらいで身体を洗ってもらいます。そのときお客様に身体を触られても――指を挿れられるくらいは我慢してください。手当は一人につき百円です」

お客が十五人なら、湯女は五人だから三人ずつ分担して一日の手当は三百円。まだ日雇労働者よりも安いくらいだが。

「勤務時間は定まっていません。お客の要望があれば朝の八時から深夜の十一時半まで。もちろん中休みは取ってもらいますが……」

十一時半から身体を洗い始めれば十二時までには終わる。しかし、洗体以上のサービスを客が求めれば――翌朝まで客と付き合うことも稀にある。

「添い寝は帳場を通してもらうことになりますが、その他のことは湯女さんとお客様の個人的な交際という建前です」

旅館が売春を斡旋しては不都合なのだろうというくらいは、梢枝にも推察できる。

「といっても、心付（こころづけ）がバラバラではお客様同士でも湯女さんの間でも、ややこしいことに

なります」
亭主は赤白青のゴムバンドを梢枝に見せた。それを亭主は手首に巻いた。
「湯女さんには足首に着けてもらいます。手首ではお客様の気が散りますから」
客はあらかじめ帳場からゴムバンドを買っておいて、サービスを受けるとき湯女に渡す。
「値段は青が三百円、赤が五百円、白が百円です」
なんとなくわかりかけている梢枝は、法外な金額に耳を疑ったりはしなかった。
「青が基本で、そのつまり……わかるかな？」
亭主は筒を握る形に指を丸めて、それを股間に近づけて前後に動かした。
梢枝は、わずかに頬を赤らめてうなずく。
「そういうことです。後で帳場に持って来てくれれば、さっき言った値段の半分でゴムバンドを買い取ります」
客が使わなかった分は元値で引き取る。
「赤のゴムバンドは、まあ、それ以上のサービスですね。湯女さんはふつうの形で楽をしたがりますが、お客様が望むなら……」
今度は指を咥えて前後に動かした。
「両方を望むお客様もいらっしゃいますが……とにかく、ズドン一発です」
白のゴムバンドは、とくに用途が定まっていない。マッサージ室から出て露天風呂の岩陰に行きたいとか、自前の束子で身体を洗ってほしいとか、とんでもないことを言い出す客もいる。その場合だけは、白バンドを何本という個別交渉になる。赤バンドもちゃんと使って、青と白で濃厚なサービスを求めるという豪勢な客もたまには居るという。

亭主が話を終えたので、葉子は暗算をしてみた。赤バンドでもへっちゃらだ。基本料金と赤バンドで合計三百五十円。客が三人つけば日当は千円を超える。休みは月に七日だから……月給二万四千円！　一流企業のサラリーマンよりも多い。もしもお客が十五人でなく満室の四十人だったら。それに、一日に二回三回と湯女を呼ぶ性豪（この言葉は婦人雑誌で覚えた）もいるかもしれない。

しかも、住み込みで賄い付き。湯女を一年も務めたら蔵が建つのではなかろうか。母の嫉妬がちっぽけなものに思えた。

奔放な新人

途中で各駅停車のディーゼルに乗り換えて、さらに旅館のライトバス（現在のマイクロバス）に来館客と乗り合わせて。『湯乃華』に着いたのは午後二時だった。

湯女には三畳部屋だが個室をあてがわれている。そこへ荷物を置いて、ひと休みする間もなく、露天風呂に隣接した控室へ連れて行かれた。

浴衣姿の（そんなに若くない）女性が一人、退屈そうにしていた。湯女さんのフミだと亭主が紹介してくれた。

「新卒の子が来るって聞いてたけど……ほんとに若いわねえ」

梢枝は梢枝で――抜けるように肌の白い小太りの女性が母よりも歳上だと亭主から聞か

されて（フミは、きつい目で亭主をにらんだ）驚いている。
「今日のところは、どういうふうに仕事をするのか見学してもらいます。服を着たままではおかしいし、かといって湯女さんと同じ格好では間違われます」
褌を締めなさいと亭主は言う。
「締め方がわからなければ手伝ってあげます」
風呂場へはいってきた梢枝を見るときの継父の目と同じ色が、亭主の瞳にも浮かんでいる。けれど、梢枝はためらわなかった。
「お願いします」
そう言って、平然と服を脱いだ――というのは強がりで。継父以外の男性に裸を見られるのは、やはり羞ずかしい。でも、これからはそんなことを言っていられない。
亭主は背後から梢枝の裸身を抱き締めるようにして褌を締めてくれた。
「六尺褌とは言うけれど、鯨尺だから実際には二メートル半くらいの長さがあるんだね。でも梢枝ちゃんは……コホン。女性は小柄だから曲尺（かねじゃく）の一メートル八十センチでも余るね」
亭主のほうが照れて、しょうもないことを口にしている。
ズロースはもちろん、股間にぴったり貼り付くようなパンティに比べても、褌のほうがそこを包んでいる感触が強い。そして、絞った布が尻を割って食い込んでくるのは初めての体験だった。違和感はあるが、性的な連想もはたらいてしまう。
「フミさん。洗体のお客様です」
浴場につながるドアが開いて、老人が声をかけた。
「はあい。梢枝もついといで」

フミは巻き髪を手拭いで包んでから浴衣を脱いで素裸になった。大きめの手拭いを腰にぐるっと巻いて、脇で結ぶ。湯船に浸かっている男性の正面に立てばまるで意味をなさないほどの短さだった。

梢枝は尻を剥き出しにしているが、股間はしっかり守られている。どっちが羞ずかしいんだろうと、そんなことを考えながら、フミについて行った。髪を包むのを忘れたと気づいたが、見学だからそんなに濡れることもないだろうと、そのままにしておいた。

フミは洗い場の端で（それ用に配置されているのだろう）平べったい岩に腰掛けている彼女と同年輩くらいの男性の前に正座した。梢枝の三倍はあろうかという乳房を隠したりはしない。

「フミと申します。お身体を洗わせていただきます」

男性は気もそぞろにうなずいて、斜め後ろで同じように（あわててフミを見倣って）正座している梢枝を眺めている。

「そっちの若い子は？」

「新人ですが、今日は見習いだけです」

「ふうん。明日からは仕事をするってこと？」

「はい。さ、お楽にしてください」

フミが備え付けの手桶に湯を汲んで、男の肩に掛ける。持参の湯桶からスポンジを取り出して身体を洗い始めた。

腕から始めて、背中、胸、腰、太腿からつま先まで順番に淡々と洗っていく。梢枝と継父の戯れほどにも微妙な雰囲気はない。

なんだ、こんなものかと――あたりを見回して。反対側の端で、もっとフミよりも若い女性が年輩の男性を洗っているのに気づいた。こちらは、かなり怪しからぬことになっている。身体じゅうを泡まみれにした男性のほうが、女性を素手で洗っている。洗っているのか愛撫しているのか。腰を包む手拭いの中にまで手が伸びても、拒む気配はない。

女性はくすぐったそうに身をくねらせているが、声は聞こえてこない。露天風呂には、他にも三人の客がいる。一人は悠然と湯に浸かって遠くの景色を眺めているが、あとの二人は洗い場に近寄って、湯女と客との痴態を見物している。

あんなふうに毎日（一日に何回も）サービスするなんて、湯女さんも大変だな――と、梢枝はわくわくしてきた。湯女の足首に白いゴムバンドが二本巻かれているのを見て、ますます羨ましくなった。

「梢枝ちゃん。ここは特に入念に洗ってさしあげるのよ。ちゃんと見てなさい」

たしなめる声に視線を戻すと。フミが客の股間を素手で洗っている。玉を両手で包んで揉み洗い（？）してから、竿を握って軽く前後にしごいた。しごくうちに、しなやかだった茎が硬い巨木に育っていく。

「ここが爛れていたり、お客様が痛がるようだったら、お客様からバンドをいただかずに終わりにするの。街外れに診療所があるから、そこを紹介してあげなさい」

性病のことを言っているんだと、梢枝は理解した。継父との入浴が桃色遊戯に変わってきてからは、梢枝は積極的に性の知識を取り込むようになっていた。母の読む婦人雑誌とか公民館の図書室の家庭向け医学書とかに限られていたが、それでも級友たちよりはずっと先を歩いている。

「もちろん、お客様はそんなことがないから――場所を替えてマッサージをいたします。梢枝ちゃん、もう戻っていいわよ」
「そりゃないよ」
客が文句を言った。
「見習なんだろ。肝心のマッサージを見学させてやらなきゃ意味がない」
「でも……」
フミが迷惑そうな顔をした。密か事（みそかごと）という言葉を待たなくても、男女の戯れを他人に覗かれたくはないに決まっている。
「梢枝ちゃんを帰すんだったら、マッサージはやめておくよ」
この客は、覗かれたがっているらしい。それとも、梢枝が他の湯女よりもずっと若いから、からかってやろうと思っているのだろうか。
「それじゃ、こうしよう」
まだためらっているフミに客は赤バンドだけでなく手持ちの白バンド五本全部を押しつけた。さらに、梢枝にまで青バンドを渡した。
「こういう仕事をするんだから、梢枝ちゃんもまさか処女じゃないだろうが、せいぜい一人か二人だろ。変な知識とか教え込まれていないか心配だ。そのあたりをフミさんがしっかり教えてやっちゃどうだい。白バンドは授業料だ。梢枝ちゃんだって、お金をもらって授業を受けられるんだから、棚ボタだろ？」
フミは小さくため息を吐いて梢枝を見た。好奇心に瞳をきらめてせているのに気づいたかどうかはともかく、ちっとも厭がっていないとはわかったろう。フミは、もらったゴム

バンドを足首に通した。
梢枝も真似をする。
マッサージ室は、露天風呂をはさんで脱衣場の反対側にある。煉瓦を積んだ羊羹みたいな小屋にトタン板のドアが四つ並んでいる。左端のドアには湯女が腰に巻く手拭いが掛けてあった。フミは客を小屋へ案内して、自分の手拭いを右端のドアに掛けた。
「あたし、このままでいいですか？」
「先生も教材も素っ裸なんだぜ。生徒だけ隠してるなんて礼儀に反するってもんだ」
フミよりも早く客が答えた。
「はあい」
梢枝は素直に褌をほどいて、手拭いの横に並べて掛けた。フミは呆れたように梢枝の顔をちらっと眺めたが、何もいわずにドアを開けた。
中は奥行きが二メートル半で幅は一メートル半。変則的な二畳間といったところか。床は分厚いゴムが敷いてあって、歩きづらいくらいに柔らかかった。ベッドの類は無く、奥の棚にカラフルな小箱や落とし紙を入れた籠が置かれている。
「へええ。トルコとは大違いだな。露天風呂だけあって、青姦気分だ」
この客はいろいろと遊んでいるのだろう。エロチックなサービスがどんどん過激化しているトルコ風呂や、売春防止法以前の遊郭との違いを細かく説明して、単純明快で野趣あふれる仕掛だと感心している。
「梢枝ちゃんは、棚の下にでも座ってて」
それくらいしか居場所がなかった。

それきりフミは梢枝を無視して――客に抱きついた。客の腰に股間をすりつけて、いったんは萎えかけていた巨木をよみがえらせる。押し倒されたのか押し倒したのか、二人は抱き合ったままゴムマットの上に横たわって――じきに、男が上になる形に落ち着いた。

手続きを踏むといった感じで、客はフミの乳房を揉んで、股間を指で穿った。手続きを終えると、客は身体を起こして棚を指差した。

「ゴムを取ってくれ」

梢枝は立ちあがって、棚を見た。カラフルな小箱に『スキン』と書いてある。コンドームをゴムともスキンとも呼ぶことくらい、梢枝は知っている。個別包装になっているコンドームを取り出して、客に渡した。棚の下に座り直して、客の一挙一動を見守る。

小袋から取り出した円盤状の物を亀頭にあてがって、くるくると巻き下げるのを見て、なるほどと思う。百聞は一見に如かず。そんな諺を思い出した。と同時に、旧作映画で観たガラス越しのキスも連想した。ゴムで包んだ男性器を挿入しても、はたして性交といえるんだろうか。キュウリや擂粉木を突っ込むのと同じではないだろうか。そんな疑問も浮かんだ。

客が装着し終えるのを待って、フミが脚を開いて膝を軽く立てた。客はその中に腰を滑り込ませて、あっさりと貫いた。

「あああ……ん」

客が顔を上げて梢枝を見た。

（この人、エッチ気分になっていないのかな？）

風呂場で梢枝に悪戯をしているときの蕩けるような継父の表情とは、まるで違っている。

が、醒めた男の顔の中で、梢枝を見詰める目だけが妖しい光を宿していた。
（青バンドは百五十円だったよね）
映画館に二回行ける。ただでもらっては申し訳ない気持ちになっている。梢枝は膝を崩して胡座になった。慣れない座り方なので、かえって身体がふらつくから――と、自分に言い訳をして両手を後ろに突いた。自然と客の目に――産毛がすこし伸びて縮れて淡く色づいたような淫毛も、この一年でふっくらしてきた淫埠も、これくらい開脚すればさすがに顔をのぞかせる貝の足のような小淫唇も、なにもかも見せつけてしまう。
「え……きつい」
フミの中で、巨木がさらに成長したのだろう。そう考えて、梢枝は悪い気がしなかった。
（大年増と小娘とじゃ、勝負にならないわよね）
客は激しく腰を使い始めた。梢枝には生々しいとか卑猥というふうには見えない。米搗きバッタみたいだと、滑稽に思った。
「あああっ……すごい……逝く、逝くううう」
鼻に抜ける甘い声だが、なんだか嘘っぽく聞こえた。そうか、こういうのが男を悦ばせるための演技なんだ。婦人雑誌の知識をおさらいする梢枝だった。
男はフミの中（ではなく、コンドームの中）に精を放つと、いっそう醒めた表情で立ち上がった。コンドームを抜いて根元を縛り、部屋の中の屑籠に捨てた。
梢枝が気を利かして、落とし紙を二人に手渡した。互いに背を向けるような形で、それぞれに股間を拭って――それで、マッサージは終わった。
フミは小屋から出ると、さっさと手拭いを腰に巻いて控室へ戻って行った。客は元から

素裸だったから、もっと手っ取り早い。梢枝だけが褌で股間を隠しながら物陰へ行きかけたが、さっきの客がまた湯に浸かるのを見て、足を止めた。サービスの延長のつもりで、さすがに湯には背を向けたが、おぼつかない手つきで褌を締め始めた。

「ちょっとごめんよ」

さっきの老人がモップを持って、今まで使っていたマッサージ室を開け放った。マッサージ小屋の脇にある水栓につながれているホースで水をゴムマットに掛けて、モップで簡単にこすった。最後に、洗い場で手桶に湯を汲んでゴムマットに流す。わずかに床が傾いているので、水は部屋の奥の壁に明けられた小さな穴から外へ流れ出ていった。布団を洗うのに比べて百倍も簡単だし、すぐに使える。

――もたついたあげく、さっきの客に手伝ってもらって、梢枝は褌を締め直した。客は亭主以上に梢枝の裸身をあれこれと触ってきたが、悪戯というほどでもなかった。本音を白状してしまうと――滑稽に思えても、男女の媾合を間近に見て幾分は妖しい気分になっていたのだから、せめて継父の半分くらいは悪戯をしてほしかった。

仕事は明日からということになっていたが。

「すまないね。さっきの団体客が、宴会の前にスッキリしておきたいと言うんでね」

ライトバスで来た団体客は十四人。この旅館としては滅多にない盛況だという。それはいいのだが――四人の湯女のうち一人が生理休暇なので、三人だと五回転になる。まともにサービスしていては、宴会の開始が午後九時になってしまう。といって、サービス時間をあまり切り詰めては評判が落ちる。梢枝が応援に加わって、サービス時間を十分だけ切

り詰めて、最後の組がマッサージを始める頃に宴会を始めれば、どうにか七時半に間に合う。
「長旅で疲れているだろうけど、頑張ってもらえますか」
「はいっ！」
元気の良すぎる返事に、亭主が苦笑した。
素肌をお仕着せの浴衣で包んで控室へ行くと、フミよりも若い女性が洗い場から戻ってきたところだった。
「ここは立入禁止……あら、その浴衣。それじゃ、あんたが新人さん」
この温泉地にふつうの湯治客は滅多に来ない。とはいえ、広告を出すのは男性向けの通俗週刊誌に限られているから、知らずに訪れる家族連れがいないでもない。それと見分けるためではなくて、宿泊客の助平根性を煽るのが目的だが、湯女のお仕着せは極端に丈が短くて、お端折り無しの対丈（ついたけ）で着ても膝小僧が見えている。だから、梢枝がかけ離れて若くても家族連れ客と見間違えられたりはしない。
「来る早々連チャンさせられて大変やね。うち、朋美。あんたと倍半分までは違わんわ」
「あ、はい。あたし、林梢枝です。よろしく……」
「名字は、仲間内でもあまり言わんほうがええよ。あ、備品はそこの棚に並んでるから」
朋美は棚から乾いた手拭いを取って、腰に巻き替えた。石鹸や軽石のはいった湯桶も、新しい物に取り換えて、あたふたと出て行った。
「梢枝ちゃんも急いでくれよ」
さっきの老人が控室にはいってきた。朋美が使っていた手桶を棚からおろして、新しい

ものに取り換えた。
亭主の前でも平然と全裸になった梢枝だ。それに、朋美の慌ただしさに巻き込まれてもいる。梢枝は浴衣を脱いで、大きめの手拭いで腰を包んだ。
老人が浴場への扉を開けて、温泉に浸かっている客の一人を眼差しで教えた。
「梢枝ちゃんの初仕事は、あの方です。よろしくお願いします」
梢枝が姿を現わすと、その客が湯から出て、すでに洗い場の右端で洗体を始めている朋美とは反対側の岩に腰掛けた。継父と同い歳くらいだが、ずっと肥っている。
客の前に梢枝が正座する。
「梢枝と申します。お身体をあわわせていただきます」
頭を下げながら、言い間違いに気づいた。そして、クスッと笑った。
「なにがおかしいんだ？」
客の声は尖っていた。
「あ、ごめんなさい。あたし、初めてで緊張してるみたいです。洗わせてって言うところを泡わせてなんて言って――でも、泡だらけになるんだから間違ってないかなって、おかしくなったんです」
「なるほど。泡だらけになるまでサービスしてくれるんだ」
客のトーンは丸くなっただけでなく、ねちっこくなった。風呂場で継父が梢枝に掛ける声の質と似ていた。
梢枝は習い覚えたばかりの手順で、客の身体を洗っていった。そして最後に股間に手を伸ばしたとき。

「きみはちっとも泡だらけになってないな。あっちを見ろよ」
洗い場に片膝を立てて座った朋美に客が背後から抱きついて、スポンジで胸を洗って（揉んで）いる。立てたほうの足首に白いゴムバンドが二本巻かれているのを見て、梢枝は最初に見た光景を思い出した。あれも朋美だったのだろう。
「初仕事って言ってたね。それじゃ、ご祝儀を兼ねてこれでどうかな」
青いゴムバンドを差し出されて、梢枝は戸惑った。
「マッサージのときは、赤で頼むからね」
青は白の三本分。
「ありがとうございます」
梢枝は受け取って、右の足首に巻いた。朋美より若くてピチピチしてるんだから五割増しで当然と思う一方で、お金に見合うだけのサービスをしてあげないと申し訳ないとも思った。評判になれば、後に控えているお客も青バンドをくれるかもしれない。もしも、受け持ちの三人全員から赤青両方をもらったら、基本料金と合わせて――千五百円の手取。一人前の大工さんだって、この半分くらい。日雇の賃金だったら三日分。
お金への執着がとくにあるわけではないけれど、貰えるものはもらっておきたい。
そんな思いが、継父との悪戯の記憶と結びついた。梢枝は客に背中を向けて、膝に乗った。父よりも太っているので背中に客の腹が当たるのがくすぐったかった。
「おっ……大胆だね」
「お客様は、スポンジであたしを洗ってください」
梢枝は尻をずらして、股間から男の肉体を突き出させた。手桶から泡を掬って両手で男

を握り、しごき洗いを始めた。
「おっ……やるねえ」
スポンジが乳房をこすり始めた。
「くはああ……」
演技ではなく、梢枝は喘いだ。すこし乱暴で痛かったが、エッチなことをしているされているという意識が、頭を痺れさせ腰を疼かせた。ここでは、母の耳を恐れる必要はない。
「気持ちいいのか？」
「父さんは……」もっと優しく揉んでくれたと言いかけて、そこで口をつぐんだ。血のつながっていない継父とはいえ、こういうことをしていたと世間に知られたら後ろ指をさされるという常識はそなえている。知っているから、禁断の果実は美味なのだけれど。
客は梢枝の言葉を聞き漏らしたのでもないだろうが、深く追求しなかった。自分の不埒な計画に頭がいっぱいだったのかもしれない。
「よーし。こっちも、手洗いをしてあげよう」
客は梢枝をすこし前に押し出した。スポンジを左手に持ち替えて乳房への悪戯を続けながら、泡まみれの右手を梢枝の股間に差し入れる。
「ここをなんて言うか、知ってるかな？」
割れ目を穿ち、頂点の肉蕾をほじくり出して摘まんだ。
「クリトリスです。それくらい、知ってます」
にょるんと指でしごかれた。
「ひゃうんっ……それ、今はやめてください。立てなくなっちゃう」

「腰を抜かされちゃ困る」
言いながら、二度三度としごく。しごくというよりは――枝豆の鞘をつまんで中身を絞り出す、そんな指の動かし方だった。実際には豆を奥へ押し込んでいるのだが。
梢枝の身体が宙に浮いて、背筋を何度も波が突っ奔った。
「梢枝ちゃん」
険しい声が、洗い場の反対側から聞こえた。
「つぎのお客様も居てんから、ええ加減でマッサージを始めとき」
脱衣場のドアの上には丸時計が掛けてある。洗体を始めて二十分が過ぎていた。
「はあい。お客さんも、それでいいですね」
「いいも悪いも……」
客は自分の腕に巻いていた赤バンドを渡しただけでなく、白バンドも五本全部をくれた。基本料金が二百円で、その場でどちらにするか決められるように赤も青も購入すれば、ちょうど千円。心付にしろ変態的な要求の見返りにしろ、白バンドは五本（五百円）が切りが良い。
手持ちのバンドを全部くれた客の気前の良さへの梢枝の感想を言葉にすれば――「うわあ、うわあ、うわあ！」といったところか。
「トルコよりも凄かったよ。マッサージも凄いんだろうね」
まだ身体が宙に浮いたまま、梢枝がふらりと立ち上がった。
「こちらへどうぞ」
腰に巻いた手拭いはたくれ上がって尻も股間も剥き出しになっていたが、気がつかない。

朋美と、後からはいってきたもうひとりの湯女は呆れた顔。湯に浸かっている三人の客は――欲情を隠そうともせず、梢枝の裸身を眺めている。

継父からの性的な悪戯を別にすれば、恋愛経験も恋の駆け引きも知らない梢枝だった。客の期待に応える方法は、ひとつしかなかった。

客はベッドも無い殺風景な部屋の様子に戸惑っているのか、それとも梢枝の出方をうかがっているのか、ぽかんと突っ立っている。

梢枝はドアを閉めるなり、客の正面にひざまずいた。顔を見上げるのはさすがに羞ずかしかったので――半勃ちになっている肉体を、パックンと咥えた。

「ん……」

梢枝の知らないことだが、客の反応は実は尋常ではない。

この時代の娼売女にとって、売春とは膣性交のことであり、肛淫も口淫も変態の極みだった。キスを許すのもフェラチオをするのも、恋人（あるいは情人）だけという昔からの気風が色濃く残っている。しかし、ここの湯女は交渉次第では口淫奉仕をする者もいるという噂を知っていたからこそ、要求もしないのに女のほうから仕掛けてきても、驚かずに済んでいる。

「んん、んん、んん……」

梢枝は両手で男の尻を抱いて、口の中で男に舌をからめながら、ゆっくりと上体を動かした。肉茎に手を添えて喉の奥を突かれないようにするとか、文字通りに手抜きして手でもしごくといったズルは仕込まれていない。

男の反応については、経験は継父ひとりだがそれなりにわきまえている。身体全体が強

張って亀頭が表面まで硬くなると感じた瞬間、梢枝は身を引いた。立ち上がって、奥の棚からコンドームを取った。
「使ってください」
ただ手渡すのは失礼かなと、また膝立ちになってコンドームを両手で奉げた。
「せっかくだから、着けてくれよ」
なにがせっかくなのかわからないけれど。「負おうと言えば抱かれよう」おんぶしてあげようと言うと、抱っこしてくれとつけ込んでくる。そんな諺がある。
「あたし、こういうの初めてだから、間違ってたら言ってくださいね」
小袋をミシン目で千切ってゴムの円盤を取り出した。円盤というか、ゴムの皮膜は信じられないほどに薄い。それが何回も巻かれて外周のリングになっている。巻き下げる向きを考えて、梢枝はコンドームを亀頭の先端にあてがった。
「それじゃ駄目だ。まん中が小さな袋になってるだろ。それをつぶしておかないと、射精のときに破れてしまう」
なるほどと、素直に納得して客の指示に従った。ゴムが薄いし、表面がぬらぬらしているので何度も指を滑らしたが、どうにか装着できた。女性の手でいじられているとはいえ、気恥ずかしさもあるのだろう。装着しているあいだに、肉体の意欲が幾分か失われていた。
そのまま、客はゴロンとあお向けに寝転がった。
（え……？）
「女の子が上に乗るやり方は知ってるかな？」
梢枝は、どう答えようかと迷った。知識としては知っている。しかし経験は無い。

「とにかく乗ってごらん。教えてあげるから」
手持ちのバンドすべてをくれた気前良さに報いようと、梢枝は男の言葉に従った。女から仕掛ける羞ずかしさに、顔を合わさないよう後ろ向きになった。膝立ちになって右手で怒張の付け根を握り、そろそろと腰を沈めていく。亀頭が淫裂を割って――そこで、梢枝の動きが止まった。浅いところでつっかえている。
「〇ンコの中は、けっこう広いんだよ。〇ンポを穴に合わせるんだ。腰を前後にずらしてごらん」
膣前庭。家庭向けの医学書に書いてあった単語を思い出した。膣口は、その真ん中あたりに開いている。じわあっと腰を動かしていくと、ぬぷっと嵌り込む感触があった。けれど、すぐにつっかえる。
「角度が合ってないんじゃないかな。向きを変えてごらん」
ちゃんと挿入できないと仕事にならない。梢枝はいったん立ち上がって客に正面を向けた。目を合わせないようにして、腰を沈めていく。さっきよりは深くまで嵌ったような気もするが、やはりつっかえる。
「もっと身体を起こしてごらん」
針に糸を通すときは、もちろん針の穴を見詰めている。それと同じで、梢枝は左手を突いて上体を倒し、結合部を覗き込んでいた。
具合の良い角度を探りながら徐々に身体を起こしていくと――ずぐうっと怒張が押し入ってきた。
「痛いっ……」

まったく予期していなかった尖烈な痛みだった。破瓜の痛みは、たいしたことがなかったのに。
「ん……？　まさか、実は初めてだったなんて言うんじゃなかろうね」
からかっている声の中に、一沫の戸惑いがあった。
「これまで一回しか経験がないんです。それもひと月半前でした」
動いていないのに痛みが強くなった――のは、梢枝の中で、さらに怒張したのだろう。
「もしかしたら、処女膜が再生しちゃったかな」
まさか――と、客が笑った。痛みが薄れた。
「馬鹿言ってないで、動いてくれよ」
「はあい」
こんなときにお行儀の良い返事をするかなあ。梢枝は内心で苦笑しながら、客の求めに素直に応じた。
曲げていた膝をすこし伸ばして腰を浮かすと、にゅるんと怒張が滑るのがはっきりとわかった。加減がわからずに、抜けてしまった。が、すぐに挿入し直せた。
継父との時には、傷口をくすぐられるような微妙な快感があったのだが、今は――ただ、体の中でなにかが蠢いているとしか感じなかった。そのかわり、自分が上になっているせいか、内臓への圧迫も感じなかった。
「うん、うん、うん、うん……」
梢枝は上下運動を始めた。呻きとか喘ぎではなく、掛け声だった。
「ちっとも感じてないね。角度を変えるとか、上下だけじゃなくて腰で『の』の字を書く

ようにくねらせるとか、工夫してみろよ」
これはお仕事なんだから、あたしが感じようと痛がろうと、さっさと埒を明けてほしいな。それが、梢枝の本音だった。
それなりに女と遊んできた男にとって、新米娼婦の心底なんてお見通しなのだろう。
「女がシラケてたんじゃ、男はちっとも楽しくないんだよ。女を俺の〇ンポで善がり狂わせてこそ、女を抱いた甲斐があるってものだ」
客は両腕を伸ばして、他の湯女に比べたらささやかな梢枝の乳房を握った。そして、力をこめて握りつぶす。
「い、痛い……やめてください」
「こうやって別の意味で女を泣かせて喜ぶやつだっている。痛いのと気持ちいいのと、どっちがいい？」
「痛いのは厭です」
「それじゃ、気持ち良くなるよう、努力しろよ。手伝ってやるから」
男の手から力が抜けて、もぎゅもぎゅふにふにと乳房を揉み始めた。
「あ……」
痛みの反動なのか。継父に揉まれるよりも気持ち良かった。
「腰が止まってるぞ。ほら、イチニ、イチニ……」
掛け声に合わせて乳房を揉まれて。それに合わせて梢枝は腰を振り始めた。
「感じてないね。もっと身体を倒して」
乳房を引っ張られて、上体を傾ける。挿入できなかったところまで身体を倒していくと、

ごりごりと怒張が中をこすった。けれど、違和感でしかない。不自然な姿勢で、膝と腰が疲れてくる。それは、腕を宙に浮かして乳房を揉んでいる客のほうも同じなのだろう。

乳房から手がはなれたとき梢枝は上体を起こしたが、身体の支えがないと動きにくい。

「押して駄目なら引いてみろっていうな。逆に背中を反らしてみちゃどうだい？」

素直に従って。倒れそうになったので後ろに手を突いた。

「あ……？」

一瞬、それまでとは違う感覚が浅い部分に生じた。気持ちいいとは言い切れないが、けっして不快ではなかった。

「横への動きも忘れないように」

客は腰を両手で持って揺すった。

「あ……？」

一瞬だが、はっきりと快感があった。熱い波が奔り抜けるようなそれとは違って、腰の奥から熱泉が湧き出るような快感だった。

「お、感じたかな。自由に動いてごらん」

客の求めに応じて、梢枝はのけぞった姿勢で身体の角度をいろいろ変えながら膝の屈伸運動を続けた。水平に円を描いたりジグザグに動かしたりもしてみた。

そのうちに――一瞬の快感を引き出すやり方がわかってきた。それを続けると、途切れ途切れの快感ではなく、腰の奥からこんこんと熱泉があふれ始めた。腰をくねらせるほど、湯量が増えてくる。上下運動を激しくすると湯が熱くなってくる。

「あっ、あっ、あっ……あああっ……吹き上げられるウ」

空中に浮かぶ感覚よりも、ずっと激しい。
「いいぞ、その調子、その調子」
客は軽く膝を曲げて手足で踏ん張りながら、梢枝の動きに合わせて腰を突き上げ始めた。
「出すぞ。一緒に逝けよ」
右手を結合部に伸ばして、新芽のように淫裂から突き出ているクリトリスを摘まんだ。
「そら、逝け！」
腰の動きよりも早くクリトリスをしごかれて。熱泉のなかから大きな波が立ち上がって背筋を突き抜けた。
「うあああああああっ……！」
梢枝の背中がいっそうそり返って、ビクンビクンと痙攣した。そのまま動きが止まって。三十秒もしてから、客の胸に崩折れた。
「ふう……凄かったな。若いから未熟という娘も多いが、きみは若いから神経が鋭いんだな」
ついに真の絶頂を知らないままに終わる女性も少なくはない。わずか二度目の性交でそこに達した梢枝は――客の言葉が正鵠を射ているのだろうが。継父との性的な戯れで開発されてきたからでもあっただろう。当時の少女といわず女性としては、性交への禁忌を育んでいなかったことも大きい。そして。理想的な客に巡り合えたからでもあったが。梢枝の奔放が客をその気にさせたと考えられなくもない。
ともかく。性交によってのみ得られる快楽を知ってしまったこと。湯女（売春）とは、気持ちのいいことをしてたくさんのお金をもらえる素敵な職業だと信じ込んでしまったこ

とが、梢枝の人生を大きく変えていくことになるとは、当人の知ることろではなかった。
「いつまでも惚けてないで、仕事をしろよ」
ぺちんと尻を叩かれて、梢枝は半分くらい正気に還った。
「はあい」
宙を漂ったまま客の腰から降りて、客が自分でコンドームをはずすのを眺めていたが。ふと思いついて――まだ鎌首をもたげて湯気を立てているそこに、顔を埋ずめた。
「おいおい……」
咥えて、唇でしごき舌で舐め、残り汁を吸い出して飲み下した。それは婦人雑誌で覚えた作法ではない。そんな破廉恥な仕種まで記事にすれば発禁ものだ。梢枝の本能、こんな目くるめく快感を与えてくれた御本尊様への感謝であり執着だった。継父に仕込まれていた下地もあった。
さすがに、清掃奉仕を終えた頃には理性も目を覚ましかけていた。急に羞ずかしくなって――照れ隠しに、またしても男を感激させた。きちんと正座して三つ指を突いたのだった。
「お粗末さまでした」
「あ、いえ……こちらこそ」
二人が同時に頭を上げて、目が合って。ぷっと吹き出した。
――マッサージ室を出て、洗い場の端でざっと身体を流して。股間の跡始末をしていなかったことに気づいて、そこも丹念に洗って。
控室に戻ると、朋美よりもさらに若い湯女が、素っ裸で煙草を吸っていた。肌を上気さ

せている梢枝を一瞥して、ふううっと紫煙を吐いた。
「ずいぶんとお盛んだったじゃん。その歳で、すっかり味を覚えちまってんだね」
さすがに、意味はわかる。梢枝は余韻から完全に醒めた。
「そんなに声が大きかったですか。あんなふうになったのは初めてだったので……」
「あんた、どこの出？　ああ、あたいは珠代。生まれは東京だけど、女護ケ島に流されたり中州で立ちんぼしたり。この歳でパンパン歴十年のお姐さんさ」
いきなり話を変えられたが。女同士の会話では珍しくもない。
「あたしは梢枝っていいます。東北で生まれ育って、こっちへ就職しました」
仲間内でも名字は隠せという朋美の忠告を思い出して、出生地も同じだろうと考えての答えだった。
「ふうん。にしちゃ、ちっとも訛ってないね。朋美なんか、関西弁が服を――着ちゃいねえな。素っ裸で歩いてらあ」
〇〇が服を着て歩いているという言い方は、たしかに湯女にはふさわしくない。梢枝はクスッと笑った。今度は相手の機嫌を損ねなかったようだ。
「正しく標準語を使えって、学校で厳しく教育されましたから」
方言でしゃべっているところを先生に聞かれると、その場で『牛殺し』。きついデコピンをされる。それでも直らなければ、水の入ったバケツを両手に持って廊下に立たされる。男子はともかく、女子はこの罰を極端に恐れた。男子にスカートをめくられたり胸を揉まれたりしても抵抗できない。水をこぼしたら四つん這いで拭き掃除をして、最初からやり直し。廊下バケツを三回繰り返したら、つぎはみんなの見ている前でズロースまで下げら

れて、お尻の直叩き――という噂だった。在学中に女子の廊下バケツは一度きりしか見ていないし、男子も悪戯は仕掛けなかったのだけれど。

「珠代さん、お客様が痺れを切らしてますよ。梢枝ちゃんは帳場へ行って、バンドの清算をしておきなさいよ」

老人が外から声を掛けた。

自分だけ『ちゃん』なんだ。子ども扱いされているみたいで、なんとなく面白くない梢枝だった。

――その日に、梢枝は三人の洗体とマッサージをした。

二番目の客は梢枝の身体を洗おうとしなかったし、マッサージ室に入るなりものも言わずに押し倒して。梢枝が感じる間もなく終わってしまった。同級生よりは歳上に見えたが、二十歳をそんなに出てもいなさそうだった。赤線が廃止されて三年。男が修行を積める道場は（この温泉地もそうだが）残されているが、先輩が後輩を武者修行に連れ出すという美風は急速に失われつつあった。若い客がちゃんと挿入できて、暴発もさせなかったのだから上出来――などと達観できる梢枝ではなかった。

最後の客は、最初の客から梢枝の奔放ぶりを聞いていた。青バンドで梢枝の裸身を制限時間いっぱいまで洗い場で弄んで、梢枝を宙に浮かせてくれた。マッサージ室でも、最初は正常位で交わって、梢枝の反応が乏しいとわかると、最初の客と同じ対面騎乗位に切り替えて梢枝を自由に動かせた。

梢枝は自分の身体を自分で翻弄して、腰の奥に熱湯を迸らせた。熱湯の中から波が立ち

上がって背骨を貫いた。そして、絶叫した。
客からもらったバンドは、サービスが終わるごとに（きちんと浴衣を着て）帳場へ持って行って帳面に付けてもらった。団体客の相手だけという約束だった梢枝は、先に仕事を終えて――百円札を十枚もらった。梢枝の目算では千三百五十円になっているはずだった。それを女将さんに尋ねると、役所の手続き費用だと説明された。住民票を移したり国民健康保険の手続とか、間違いのないよう行政書士に依頼する費用の一部だという。
自分でもできなくはないだろうが、街まで下りてそんなことをしていたら一日で終わるかどうか。そのあいだに一人でも二人でも接客していたほうが率（りつ）が良いとは思うけれど。事前に説明されずに徴収されたことは、不意打ちに遭ったようで面白くはなかった。

桃色の暴走

宴会の賑わいを聞きながら、梢枝は早々に床に就いた。夜行列車の疲れ。一度きりの経験しかなかったのに、いきなり一日に三度もの性交。しかも、みずから激しく動いて二度も昇り詰めた。心身ともにくたびれ果てて、梢枝はすぐに深い眠りに落ちた。宙を漂う感覚に包まれた心地良い眠りだった。
廊下を行き来するかすかな物音で、梢枝は目を覚ました。まだ、朝の陽光が柔らかい。

梢枝は起き上がって、ちょっと考えてから湯女のお仕着せ――膝小僧が露出する浴衣を着た。浴衣だからズロースも穿かない。さすがに、この丈だと股間が心許無いけれど、和装なのに洋物の下着なんて、羽織袴にネクタイを締めるようなものだ。

調理場へ行って、配膳の支度をしている仲居に声を掛けた。

「おはようございます」

「ああ、湯女の新人さんね。ほんとうに若いわねえ」

手伝うことはないでしょうかと尋ねたら、女将さんのところへ行くように言われた。

「梢枝ちゃんは、まだ街の様子を知らないだろ。案内したげるから、洋服に着替えといで」

また三畳ひと間の部屋へ戻って、あわただしく着替える。ここへ着いたときの服はいちおうのよそ行きなので、荷物の中から着古したスカートとカーデガンを引っ張り出した。

亭主の武田剛一が五十歳くらい（と、梢枝は見当をつけている）だから女将さんもそれなりの歳なのだろうが、きちっと髪を結って柄物を着こなした姿は、三十代半ばくらいに見えた。――後で知ったのだが、女将さんは湯女のフミと二つしか違っていなかった。

女将は温泉街をぐるっとひと巡りして、漠然と歩いていては見落としそうなあれこれを教えてくれた。飲食店や土産物屋に挟まれて肩をすぼめている雑貨屋とか本屋。宿泊客が足を向けない裏通りにある小さな八百屋や魚屋や米屋。こちらは、三食が賄いだから、旅館の従業員には縁がない。

最後に女将は、街外れの大きな民家の前で足を止めた。門の横に〒の看板があるので、特定郵便局だとわかった。

「給金はこまめに貯金しておきなさい。持ちつけない大金が手元にあると、ついつい散財

しがちになるから」
そう言ってから、あらためて女将は梢枝の身なりを眺めて。
「まあ……普段着のひと揃いくらいは買いなさい。あまりみすぼらしい格好では、『湯乃華』の沽券にかかわります」
都会まで出なくても、いろんな行商人が向こうから来てくれる。デパートで買うよりも値は張るくらいだが。
「仲居さんとは違って、あんたたちは稼ぎが太いから、たいした出費じゃないわね」
そこで女将は言葉を切って、表情をあらためた。
「その稼ぎのことで言っておきますけれど。昨日のはやり過ぎです」
洗い場でいちゃつき過ぎると、女将は言った。お客に身体を洗ってもらうくらいは、目をつむる。けれど、自分から抱きついたり身体を擦りつけて腰を振ったりは、風紀の乱れ以前の問題だという。湯女は、お客の身体を洗うのが仕事。おおっぴらに桃色サービスをすると、御上から宿の責任を問われかねない。
「マッサージ室は他人の目が届かないから、湯女さんがお客と恋に落ちてもわかりませんけどね」
それでも、外まで聞こえるような大声は慎みなさいと、女将は釘を刺した。
「はい……気をつけます」
とは答えたけれど。意識して叫んでいるのではない。漫才を聴いて笑うな、悲恋の映画を観て泣くなと言われたようなものだ。聴かなければいいし観なければいい。マッサージのときは――感じないように努めればいいのだけれど。

九時過ぎに、梢枝を名指しで客がついた。
「都会のキャバレーみたいな指名制度はやっていませんけど」
そういう仕組があるということ自体、梢枝には初耳だったが。
「これは、そのお客様からの心付です」
お年玉袋よりはすこし大きな『寸志』と書かれた白い封筒を開けてみると、百円札がはいっていた。
「うんとサービスしてあげなさい」
亭主はそこでわざとらしく斜め上に視線を飛ばして。
「元の地形を活かして湯壺の後ろは岩場になっているが、あれは失敗だったな。裏手でお客様に過剰なサービスをする湯女さんがいて、困ったものだ」
湯女の桃色サービスについて、亭主さんは女将さんとは違う意見を持っているようだと、梢枝は察した。
――控室へ行くと、フミも支度をしているところだった。
「昨日の団体客は、助平ぞろいだね」
十四人のうち八人が朝風呂を所望したのだという。湯女を目当ての個人客も、湯女付きの宴会に来る団体客も、たいていは一泊二日で湯女を頼むのは一回こっきり。帰り際まで遊びたがる客は五人に一人くらいというのが、これまでの相場だった。
「あんたのせいもあるかな」
梢枝の過剰な洗体サービスとマッサージ室での嬌声とで、朝勃ちが治まらないのかもし

れないと、フミが言った。
もっとも。梢枝を指名したのは、団体客のメンバーではなかった。フミの仕事を見学したときの客だった。
「梢枝です。心付をくださって、ありがとうございました」
洗い椅子代わりの岩に座った客の前に正座して、梢枝はていねいに頭を下げた。
「ずるいよなあ」
客がいきなり文句を言ったが、顔は怒っていない。
「今日から仕事だっていうから、あのあとすぐ、予約しといたんだ。そしたら、もう仕事を始めてるっていうじゃないか」
「……お客様が多かったんで、応援に駆り出されたんです」
「おかげで初物を食い損ねた――その分、たっぷりサービスをしてくれよ。昨日の乱れっぷりは、噂に聞いてるよ」
帳場で客に売るゴムバンドは、とくに客からの申し出がないときは赤青一本ずつと白が五本で千三百円。洗体の基本料金と合わせて千五百円ときりがいい。ところが、この客はさらに赤バンドを買い足していた。その二本の赤バンドを、いきなり梢枝に渡した。
「僕も四十を過ぎた。連発は利かない。洗体に青バンドの追加で、抱きついたり腰掛けたりしたんだってね。赤ならどうなるか、ちょっと怖いな」
客が意味ありげに笑った。金額を口にするのは御法度と教えられているが、客も同じらしい。お金ではなくてアクセサリーだとも、亭主は言っていた。
しばらくはおとなしく手だけで客の身体を簡単に洗った。石鹸を湯で流して掛け時計を

振り返ると、まだ十五分も経っていなかった。残った時間は亭主の独り言をさっそく使わせてもらうと、赤バンド二本をもらったときから決めている。

「あの岩山の後ろにも場所があるそうなんです。行ってみませんか」

洗い場の端からさらに奥へ向かう梢枝に、珠代が声を掛けた。

「水道の水を持ってきな」

言葉に従って、備え付けの湯桶二つに水を張った。

山の斜面を切り開いて造られた露天浴場は、正面の樹木は伐採して展望を確保しているが、背面は岩山になっている。裏から見ると、積み重ねた岩はコンクリートで補強されている。両端が湯壺を囲むように湾曲しているのは、万が一の土砂崩れをそらせる目的なのだろうが。それでも、まん中あたりまで入り込むと、右手は脱衣場の端しか見えない。左手はマッサージ小屋で完全にふさがれている。ここにも、洗い場と同じように平たい小岩が置かれていた。引湯の配管が地面に露出していて、そこから蛇口が立ち上がっている。

こういう仕掛が準備されているくらいだから、女将さんの小言も建前に過ぎないんだろうと、梢枝は判断した。

蛇口から出る湯は、かなり熱かった。持ってきた水で三割ほど埋めて、ちょうどいい。

梢枝は腰に巻いた手拭いをほどいて全裸になって、後ろ向きで客の膝にまたがった。スポンジと石鹸を渡して。

「今度は、あたしを洗ってください」

客はスポンジを置いて、手に石鹸をなすりつけた。

「こんな感じでいいかな？」

腋の下から両手を前にまわして乳房を掬い上げ、ふにふにもぎゅもぎゅと強弱をつけて揉み立てた。
「うあ……」
出かかった声を、梢枝は両手でふさいだ。
演技ではなく本気で感じていると、客にもわかる。ぴょこんと突き出した乳首も指で転がして――梢枝から喘ぎを絞り出そうとする。
客の両手が乳房からはなれて下腹部を滑って。自分も開脚して梢枝の両腿をいっそう大きく開かせ、左手の指で大淫唇を左右に割り右手で淫裂の頂点をまさぐる。すでに充血しているクリトリスを探り当てて、にょるんと包皮を剥いた。
「ひゃんんっ……」
手で押さえた口から甲高い嬌声が漏れた。
剥き出した中身を、客は激しくしごいた。
チリチリッとした鋭い痛みに、梢枝は反射的に腰を引いた。
「痛い……もっと、やさしくしてください」
駆け引きとかではなかったが。お金をいただいているお客様という意識と、自分を気持ち良くしてくれる男性という認識と。抗議の声には自然と媚びがにじんでいた。
「お、そうか」
客は、おっかなびっくりといった感じで、ふたたびクリトリスをつまんだ。
「あの……外からつままれるほうが、気持ちいいんです」
梢枝のおねだりを、客は素直に聞き入れてくれた。包皮ごとつまむというよりも二本の

指で挟んで、小刻みにしごき始める。たちまち股間が波立ち始めて、うねりが大きく熱くなっていく。
そうだ、あれをしなくちゃ――股間から突き出ている男の肉棒を、梢枝は両手で握った。そして、上下にしごく。
「僕のは、もっと激しくしごいても大丈夫だ」
そう言われて気づく。クリトリスは男性器ををうんと小さくした形だ。だから、この人はあんなに強くこすったんだろうか。
「まるで操縦桿だな」
客が梢枝の肩越しに見下ろして、感想を述べた。
戦闘機のハンドル（？）が床から突き出た一本の棒だという知識は、梢枝にもある。それにしても、こんなときに変なことを考えるんだなと――そちらのほうが、梢枝にしては面白かった。が、快感の大波にさらわれて、そんなことはどうでもよくなる。
「くうう……駄目。もう……マッサージを始めさせてください」
男は梢枝の中をぐいっと抉ってから、梢枝の尻を押して立ち上がらせた。
「もう滑油はじゅうぶんに暖まっているね」
カツユの意味はわからなかったが、自分の中が温泉より熱く潤っているのはわかる。
「しかし、女にも操縦桿があるとは知らなかったな」
「知らなくて、あんなことをしたんですか？」
岩陰から出ると、目の前がマッサージ小屋。手に持っていた腰巻用の手拭いをドアに掛けて、梢枝は男を引き入れた。

「実は、キミにマッサージをしてもらったやつが大声で戦果を自慢してたんでね。連中の宴会に紛れ込んで、肉弾戦の詳細を聞き出したんだ」
うへえ。というのが、梢枝の感想だった。まったく、男の人って……。でも、それだけ自分に執着してくれてたんだ(初物食いのつもりが、鳶に油揚げをさらわれたんだものね)と思うと、満更でもない。
「それじゃ……あたしが上になるほうが感じやすいってことも、御存知なんですね」
客は腰に巻いていた手拭いをはずして、黙ってゴムマットの上に胡坐で座った。
「特上をおまかせで頼むよ」
握り寿司の注文みたいなことを言う。
「身ぐるみ剥いでくれたっていいんだぜ」
左腕の青と白のバンドをピチッと弾いた。
梢枝は客の太っ腹に驚いている。赤バンド二本で梢枝の稼ぎは五百円だが、客は千円の出費だ。ご祝儀の百円もあるし洗体の基本料金もある。さらに青バンド一本と白バンド五本までとなると、全部で二千百円。一か月毎日封切館に通えるほどの金額だ。これだけの好意に答える術を、梢枝はひとつしか知らない。
座ったお客に立ち上がってもらうのさえ、自分勝手なように思えて。梢枝は身を投げ出すようにして、客の股間に顔をうずめた。すでに屹立していた巨木が、梢枝の口の中でいっそう硬く狂棒化する。
梢枝は心を込めて、でも暴発させないように加減して、凶棒に奉仕した。金で買われたというふうには、考えていない。金額が、そのまま自分への好意だと思っている。怖くな

るくらい気持ち良くさせてもらって、しかも大金がもらえる。なんだか申し訳ない気持ちになって、ますます奉仕に熱がこもる。

「こんなに愛おしそうにしゃぶってくれるのは、キミが初めてだよ。でも、そんなに感じてはいなさそうだな。僕のことはいいから、キミが愉しめよ。そのほうが、僕もうれしい」

昨日最初についた客も、そんなことを言っていた。

梢枝が身体を起こすと、それと察して客が上体を倒した。ちょっと考えてから、脚を閉じ加減にした。わざわざ玉を持ち上げて腿の上に乗せた。

根っ子まで丸見えになった巨木に向かって、梢枝は腰を沈めていった。もう、角度も要領もわかっている。ずぐぐぐぐっと、内側をこすられるように姿勢を調整しながら、奥まで迎え入れた挿れた。

「ふあああ……」

体の中芯を満たされる感覚は、快感というよりも幸福感そのものだった。尻の谷間で挟んだ玉の感触も、こりこりしていて新鮮だった。

「おい。サックを忘れてるぞ」

きつい声で注意されて、幸福感がシャボン玉みたいに弾けた。

「だって、着けないほうが男の人は気持ちいいんでしょ？」

昨日の二人目の客が言っていたのを思い出した。

「そういう問題じゃない。妊娠したら、どうするんだ。それに、病気の問題もある」

叱られても、ピンとこない。一回くらい着けなくても、大丈夫なんじゃないかなと――根拠もなく思った。でも、着けないとお客様を不快にさせるみたいだから。梢枝はコンド

ームを取りに立ち上がった。
あらためて客の横に座って。もう慣れた手つきで巨木にかぶせた。そして、ふんわかした気分が冷めないうちにと、馬乗りになった。おまかせなんだし、あたしが気持ち良くなるとお客が悦んでくれるんだから――梢枝は左手で身体を支えて軽くのけぞった。この角度が、いちばん大波を起こしやすい。
その角度を保って腰をくねらせながら浮かして、ずぐうっと落とし込む。繰り返すうちに客がすこし脚を開いて玉を護ったのにも、梢枝は気づかない。
「あ……くうう……いいい……」
自分の声を聞いて、半分くらい我に還った。大声を出してはいけない。そう思うと、かえって叫びたくなる。
「うああ……浮かべないよおお」
「どうした？　滑油が飛び散るほどになってるのに、もどかしそうだな？」
「声を出すなって……女将さんに叱られたんです」
それなら――と、客は手を伸ばして、手拭いを引き寄せた。きつく絞ってから四つに折り直して、それを梢枝の顔に突きつけた。
「これを咥えてろよ」
男性の股間を包んでいた手拭いを口に突っ込まれることに、屈辱は感じなかった。
「もっとこっちに」
肩をつかんで引き寄せると、客は青のゴムバンドを大きく広げて梢枝の頭に通した。ゴムバンドがU字形に折られた手拭いを押さえる。

「叫んでごらん」
「ぎあああ！」
力いっぱいに叫んでも、ふつうの会話よりちょっと大きいくらいにしかならない。
「カウル全開。赤ブーストいっぱいまでブン回せ」
ぺちんと尻を叩かれて。梢枝は上体をのけぞらせた姿勢に戻って、腰の運動を再開した。この姿勢だと、膝はあまり動かさずに腰を突き出すような動きのほうが快感は強い。
「うあああああ……浮かんだよお！　波が……くだけるうう！」
けれど、宙に浮かんだまま、最後の大波が来ない。客の様子をうかがうと――両手を頭の下に敷いて、梢枝の乱れる様を眺めている。弄ってくださいとおねだりをするのはさすがに羞ずかしい。梢枝は左手だけで身体を支え、右手を股間へもっていった。中身を押し込むように包皮をつまんだ。
途端に大波が熱湯の中から噴き上がった。
「むぁぁぁぁぁっ……はじける、はじけちゃううう！」
がくんがくんがくんと、腰が震えて――のけぞったまま、硬直した。
客が身体を起こして、梢枝を押し倒した。
「おまかせとは言ったが、おいてきぼりはひどいな」
結合したまま梢枝の太腿を肩に担ぎ上げて、猛然と荒腰を使い始めた。
絶頂を漂っている梢枝としては、しばらくそっとしておいてほしいのだが。大金をもらってのサービスだということまで忘れてはいない。自分からは動かないが、乱暴に揺すられて穴の奥まで杭を打ち込まれても拒みはしなかった。

そうして我慢しているうちに。また腰の奥に熱湯が溜まってきて、前よりも大きなうねりが始まったのだが――波が噴き上げる前に、ビクビクッと痙攣が股間に伝わってきて。客の動きが止まった。

今度は自分がおいきてぼりを食らった気分だったが。客が立ち上がって、前を押さえたまま落とし紙を取りに行く。梢枝は急いで口から手拭いを抜き取った。自分で始末をしている男の前にひざまずいて、生身を口にふくんだ。絶頂まで昇り詰めさせてくれたお礼のつもりだった。客は心付と二本の赤バンドの威力だと思ったかもしれないが。

「ふううう。生きていてこそ――だなあ」

ああ、そうかと、梢枝は思い至った。この年齢の男性は、終戦を軍隊で迎えている。操縦桿とか言っていたから、もしかしたら。

「お客さんて、戦闘機に乗ってらしたんですか？」

生きていてこそという言葉を考え合わせると、特攻隊員だったのかもしれない。けれど、そのことに触れられたくない人が多いのを、梢枝も知っている。

「整備員さ。十時間ほどは飛行訓練を受けたが、適性に欠けると言われて地べた勤務だ」

おかげで生き延びたんだがね――と、苦っぽく付け加えた。そして、股間を隠さずに素裸のままマッサージ室を出て行った。

気前が良くて、セックスも上手で、しかもニヒルなところがある。これまで梢枝が知らなかった種類の男性だった。こんな人と出会えたのも、母さんがあたしを湯女に売ってくれたおかげだ。半分は皮肉だが半分は本気で、そんなことを考えた。

が、済んだ客の印象をいつまでも引きずっているわけにはいかない。いったん控室に戻

って、乱れた髪をちゃちゃっと直して、腰巻の手拭いも乾いたものに替えて。すぐに二人目の接客を始めなければならなかった。

団体客を昼前に送り出すと、旅館全体が手持無沙汰になった。今日も明日も、予約客は片手で足りる。飛び込みの宿泊客は見込めないが――うまく乗り継げば東京からでも四時間だから、昼頃に来て入浴だけする男性客も何人かはいる。もちろん、そういう客が来るようになったのは、赤線が廃止されてこの地に湯女が登場した三年前からだ。

結局その日は三人の宿泊客と四人の入浴客とで、梢枝もさらに二人の客を取って、実入りは行政書士への支払や雑費を差し引いても千五百円になった。

次の日は赤青白の大盤振る舞いをしてくれる客もいなくて、二人で六百円だけ。取り分は七百円なのだが、コンドームの購入費として百円を引かれた。マッサージ室で湯女が客と自由恋愛をするというのが建前だから、帳簿上では自分で購入したことにされる。もっとも――手拭いや石鹸、スポンジなどは支給してくれるのだから、トルコ風呂などに比べれば良心的だと、自称『パンパン歴』十年の珠代が教えてくれた。

梢枝は暇を持て余したが、両親に手紙を書こうとは思わなかった。継父とは、連れ込み宿で女にしてもらって、それで生き別れたと思い定めている。実母には――（継父との性的な戯れで）裏切っていたという思いと（事前の相談もなく勝手に湯女に売られて）裏切られたという思いとが絡まり合っている。

梢枝は継父におねだりして買ってもらったよそ行きの服に着替えて、散歩に出た。気分としては、探索だった。女将さんに教えてもらった裏通りの店なんかもひと巡りしてから、

さらに山へ向かう道へ足を向けた――ところを呼び止められた。
「あなた――もしかして、『湯乃華』に来た新人さん？」
湯女のお仕着せと同じくらいに丈の短い浴衣を着た女性だった。思い切り襟を抜いて、肩がほぼ露出している。平帯ではなく柄物の半巾帯びで、前にお太鼓を作っている。きちんと化粧をして、髪を両サイドで丸くまとめていた。
「あちきは『美人湯』の花扇っていいますんえ。て、お仲間にまで廓言葉を使うこともないか。ん？　この格好？　遊郭の雰囲気というのが『美人湯』の売りなの。看板は背負ってないけど、サンドイッチウーマンてとこかな」
「あたし、梢枝っていいます。二日前に就職したばかりです」
気圧されながら、どうにか挨拶はした。
「ふうん……」
花扇は、値踏みをするように梢枝を眺める。
「あのお堅い『湯乃華』にしちゃ、思いきったことをしたわね。まあ、湯女は水商売じゃないから、あなたを働かせても法律違反にはならないんだろうけどね」
湯女は水商売じゃなくてお湯商売なんだろうかと内心でおかしくなって、法律違反という言葉ですこし不安になって、でもすぐに開き直った。
「お姉さんのところにもマッサージ室はあるんでしょ。あれだって、湯女とお客さんの勝手な恋愛だから、法律違反じゃないですよね」
花扇が正面から梢枝の顔を眺めた。
「へええ。なかなか言うじゃない。気に入ったよ」

もうちょっと話をしようよ。おごってあげるからついといで――と、花扇は梢枝を連れて街へ引き返しかけたのだが。

パパーン。

クラクションの音とともに、乗用車が坂道を登ってきた。

「あら。うちの車だ。おごりは今度ね」

足を速めた花扇に追いついて事情を尋ねると。

「乗合バスは不便だから、団体客の無い日は乗用車で送迎をしてるの。もちろん、振りの客は乗せた者勝ち。だからサンドイッチウーマンなんか必要ないのにねえ」

『湯乃華』の女将さんはきちっとした身なりで外出しなさいと言うが、『仙寿庵』は方針が違うんだな。そういうふうに梢枝は理解した。

気勢をそがれたので、梢枝も探索を取りやめて旅館に戻った。

翌日は月が替わって、どこの会社も年度末のドタバタから解放されて、しかも土曜日。三軒の温泉旅館は、どこも満室の盛況だった。『湯乃華』は二組の団体客を迎えて、四人部屋の五室全部が満杯、二人部屋も十室に十六人。もっとも、三十六人のうち九人は女性だったから、湯女にとっては二十七人の客ということになる。それでも――前日から生理になっていた朋美も、穴の奥に海綿を詰め込んでの奮闘となった。

詰め物をしていても経血がすこしは漏れるので、朋美ひとりだけ、赤い手拭いを腰に巻いた。朋美に当たった客は青バンドで我慢させられて――翌朝は梢枝を含む三人が早起きしなければならなくなった。前日は六人をひたすら処理して不完全燃焼気味だった梢枝は、

青バンドだけで、抱きつき洗いからフェラチオも騎乗位もサービスしまくった――のではなく、みずからの淫欲を解き放ったのだった。

三日間の生理休暇と月に四回の公休という約束だったが、団体客のときは手伝うこともあって、四月末日までに梢枝は二十九日を働いた。そして、手取は雑費とか役所の手続きを代行してもらう手数料を引かれても二万五千円を超えた。もっとも、出費も多かった。行商人が持ち込んだカタログでサイズを指定して洋服を注文したり、化粧セットは婦人の嗜みとしても、温泉街を歩くにはふさわしくないようなアクセサリー類も、つい口車に乗せられて幾つか買ってしまった。それでも、さっそくに作った貯金通帳には一万円が残った。中小企業の平社員の月給に匹敵する金額だった。

梢枝は性活を満喫していた。

「たんびに気を遣ってたら身体が持たねえよ」

パンパン歴十年を誇る珠代が親身になって忠告してくれたが、ふんわか漂っている気分のままストンと眠りに落ちて、朝に目が覚めると気分爽快。弱アルカリ性の温泉のせいもあるのだろうけど、肌がしっとりと輝いている。男性と交わればそれが刺激になって女性ホルモンがたくさん分泌されるからだろうと、婦人雑誌で仕入れた知識を実感している梢枝だった。

そんな梢枝でも、苦手な客はいる。年齢とか体型ではない。

我を忘れて大声で喘がないようにと、手拭いを余分に持ち込んで、マッサージ室ではそれを口に詰めて自由恋愛に耽るのが習慣になっているのだが。

「サルグツワかあ。誘拐されてこれから犯されるって雰囲気だな。しかし、両手が自由じぶち壊しだ」
梢枝の両手を後ろへねじって、手首に青バンドを嵌めた客がいる。うんと引き伸ばして８の字形にねじり、もう一方の手首にも通した。
「これだけじゃすぐに抜けるかな」
さらに白バンドで縛る。そして、梢枝を押し倒して犯した。
お金をもらってのサービスだが、梢枝としては犯されたという形容がぴったりの気分だった。セックスは好きだし、抱きついて男の身体を洗ったり、逆にあちこちを洗われたりするのも楽しい。他人の目には変態じみて見えるかもしれないと（先輩からの何度かの忠告で）自覚するようにはなってきたが、それでもイチャツキの範疇だと思っている。
けれど。ゴッコとはいえ、女性の自由を奪って犯す男に好意を持てるはずもなかった。もしも――手を使えないまま騎乗位を強いられていたら、梢枝の感想も異なっていたかもしれない。いくら剛直とはいえ、杭のように直立不動ではない。咥え込もうとすれば逃げられて、もどかしくもなるだろう。そのぶん、うまく挿れられたときは悦びも大きい。手で身体を支えずに腰を振れば筋肉の負担は大きいが、それだけに新たな快感に目覚めていたかもしれない。しかし、そうはならなかった。
最初の客で過剰サービスや騎乗位が大好きになったのとは真反対で、猟奇的な行為への関心は梢枝の中で（一度は）葬り去られたのだった。梢枝がこの客をどう思ったかは――事前にも事後にもフェラチオをしなかったというだけでじゅうぶんだろう。
とはいえ。そういった方面の遊びを梢枝は拒否しなかった。赤青白のバンドを全部（白

は五本）くれるのだし、客が悪乗りしてもせいぜいお尻を叩かれるか乳房をゴムバンドでくびられるか。学校で先生にビンタを張られるのとあまり違いはなかった。

梢枝に変態めいた戯れを仕掛けるのは、個人で訪れる日帰り入浴客がほとんどだった。女を縛ったり叩いたりして悦ぶような男は変態性欲者のレッテルを貼られて社会的にも抹殺される、こればかりは古き悪しき時代だった。振りの客は、つまり時間も金もそれなりに余裕がある。月を空けず入浴に来ては、ゴムバンドを多めに買って、それなりの見返りを梢枝に求める者もいた。

たいていの要求には応じた梢枝だが、さすがに断固として拒絶する内容もある。清潔な風呂場にふさわしくない行為だった。排泄にかかわる要求は、生理的にも受け付けられなかった。口も女の穴も使うんだから、もうひとつの穴だって挿れさせろなどという客は、排泄そのものにかかわる要求よりも多かったが、これも（実は、いくらか興味を惹かれたのだが）断わっていた。

先輩の虐め

そんな牧歌的な桃色郷を大きく揺るがす事件が起きた。梅雨で客足が細るさ中、風俗ルポライターを名乗る若い男が『湯乃華』に泊まったのである。一人だけで泊まりに来る客は珍しいが、濃厚お色気サービスをする飛び切り若い湯女の評判を聞きつけて、電話予約

のときから梢枝を指名してきた。
当時（令和の現代でもそうだが）、男性向けの通俗週刊誌には『マル秘スポット』とか『知られざる穴場』の紹介記事があふれていた。取材される側も、いい宣伝になるくらいにしか思っていない。
露天風呂とはいうが、雨除けの屋根は設けられている。洗い場では京子と朋美が、それぞれの客を相手に洗体の最中だった。求められれば客に好きなだけ身体をさわらせる朋美も、まだ足首にバンドを巻いていない。
「ずいぶんと若いね。歳は幾つ？」
この質問に、梢枝は慣れっこになっている。
「この春に卒業して、すぐここに就職したんです」
「卒業って、高校かな。まさか小学校じゃないよね？」
狡い質問だなと、梢枝は思った。短大卒の才女がこんな職業に就くはずもないから、両方を否定したら自動的に答えが出てしまう。いつものように
「さあ……ご想像におかませします」では、まずいんじゃないだろうか。相手はルポライターなんだから、十三歳の少女が湯女をしているなんて、わざと嘘を書かないとも限らない。警察か労働基準監督署か保健所か知らないけれど、調べがはいって旅館に迷惑をかけるかもしれない。
「女性に歳を聞くなんて、野暮ですよ」
最年長のフミの答えを真似してみた。
「そんなことより。お客さんて、取材に来られたんでしょ。だったら、ここで青のバンド

を使わなくちゃ」
お色気サービスのほうへ関心を向けさせようとした。江戸時代の湯女と同じように最後まで出来るというのが、この温泉地の謳い文句なのだから、女将さんにも文句は言われないだろう。事実――洗い場での過剰サービスを叱られたのは最初だけで、今では黙認してくれている。
「へえ。なにをしてくれるのかな？」
ルポライターは気前よく青バンドを渡してくれた。それを足首に通して。
いつものように、梢枝は岩山の裏手に男を案内した。洗い椅子代わりの小岩に座らせ、スポンジに石鹸を泡立たせて男に持たせる。自分は後ろ向きになって男の腿に乗る。
「あたしを洗ってください。もちろん、ここもたっぷりお願いします」
股間から聳え立っている巨木を握って言うのだから、ここがどこか明白だ。
男はスポンジをさっさと床に置いて、左手で乳房を揉みながら右手は股間をまさぐる。
「柔肌は手洗いが一番だよ」
風俗ルポライターを名乗るだけあって、遊び慣れているのだろう。強すぎも弱すぎもしないねちっこい愛撫で、たちまち梢枝の官能に火を点じた。
「んああ……お客さん、いいですうう」
早々と猿轡を咥えようかと思ったほどだ。腰の奥の疼きに焦れて、男の上で尻をくねらせた。剛毛が尻肉をくすぐって、それも官能を刺激する。
「梢枝ちゃんこそ、この歳でずいぶんと開発されてるじゃないか」
「だって……これがお仕事ですから」

梢枝は、サービスではなく自分の欲求を満たすために――向きを変えて客に抱きついた。腰を突き出して、すでに硬くしこっている蕾を剛毛に押しつけた。
「あああっ……いい。浮かんじゃう……浮かんでる」
水栓がひねられて、腰の奥に熱湯がたまっていく。ここから掛け時計は見えないが、洗体を始めてから二十分と経っていないだろう。けれど、あと十分もこんなサービスを続けるのは我慢できなかった。
「あの……すこし早いけど、マッサージをさせてください」
ルポライターは梢枝の尻から手を差し入れて、淫唇の中をえぐった。
「逆だろ。僕が梢枝ちゃんをマッサージするんじゃないか？」
「どっちも……です。あ、赤のゴムバンドをくださいね」
さすがに、娼売までは忘れていない。
腰の手拭いは『使用中』の目印にドアの前に掛けて。すっぽんぽんでマッサージ室にはいると、ドアを閉めるのももどかしく、梢枝は客の前にひざまずいた。
若いだけあって、一分や二分の中断くらいではまったく萎れていない。梢枝は上からおおいかぶさるようにして、巨木を口に咥えた。じゅうぶんに洗ってあるから、汚いなんて思わない。至高の快楽を与えてくださる御神木だ。
「おおお。尺八を吹いてくれるというのは、ほんとうだったんだ」
男が興奮の極致に達しているのが、それを咥えている梢枝には感じ取れた。
「このまま出しちゃ、もったいないでしょ」
口淫奉仕はあっさりと切り上げて、奥からコンドームを持って来て、男にかぶせた。最

初の客から仕込まれたので自然とそうしているのだが、湯女の中ではほかの店も含めて梢枝だけらしい。というか、この時代にコンドームを必須としているところは少ない。最下級の女たちはコンドーム代さえけちるし、湯女の何倍もふんだくる高級トルコ嬢は生本番があたりまえだった。大衆向けのトルコやチョンの間では使っているが、女は梢枝ほどに親切ではない。

「お客さんが下になってくれますか。あ、これはあたしだけのスタイルなんですけど」

団体客でも来ようものなら一日に五人以上の相手をしなければならないのだから、自分で動いていては疲れ果ててしまう――というのが、先輩たちの忠告だった。梢枝自身は、まったく平気どころか、騎乗位が気に入っているのだが、女を組み敷いてこそ男だという考えの持ち主も多い。客の意向に逆らってまで、自分の快楽を追求するわけにもいかない。梢枝が昇り詰めると喜んでくれる客は多いが。

「自分だけ善がって、娼売をちゃんとしろよ」などと怒る客も十人に一人くらいはいる。

――洗体を早めに切り上げたこともあったし、クリトリスをほじくってほしいというおねだりを男が喜んでかなえてくれたせいもあって。梢枝は熱泉の大奔流に吹き上げられ、シャボン玉ではなく花火のように破裂して果てた。

どちらもじゅうぶんに満足してマッサージ室を出て。それで湯女の仕事は終わったのだが、ルポライターの求めに応じてインタビューを受けた。これには亭主も女将も乗り気で、空いている客室を提供もしてくれた。

ルポライターはさすがに聞き上手で、三十分間のインタビューのうちに梢枝は、実年齢はもちろん、母に売られた形での就職の経緯や、その理由まで打ち明けていた。最後には

露天風呂に戻って、腰に手拭いを巻いただけの湯女姿を写真に――梢枝の感覚としては『撮られた』のではなく撮ってもらった。

日帰りで行ける秘湯の本番湯女

そんなタイトルの記事が週刊誌に載ったのは、取材から二週間後だった。巻頭のカラーページに梢枝の半裸写真が掲載されて、本文は『体験記』とインタビューを主体に構成されていた。『湯乃華』だけでなく『仙寿庵』と『美人湯』も紹介されていて、それぞれに所属する湯女の名前と公称年齢（三十七歳のフミは三十二歳になっている）も掲載されていたが、梢枝の特集記事の感が強い。

日本全国に生き恥を曝すこともないだろうにねえ――というのが、他の湯女にかぎらず、当時の女性一般の感想だったろう。男の性欲を満たす仕事の女性が広く認知され、さらにはアイドルになったり、小学生の「将来なりたい職業」にランク入りするには、四半世紀以上の時を待たなければならない。

話を昭和三十六年の当時に戻して。

週刊誌が発売されたその日から、三軒の旅館に掛かってくる電話は十倍に増えた。といっても、一日に数本だったのが三十本くらいになっただけだから、てんてこ舞いというほどでもない。日帰りの入浴を希望する客の大半は、湯女を待っているうちに日が暮れると聞かされて諦めるし、だからといって泊りがけで遊ぼうという好き者も数は知れていた。つまりは、程よい繁昌に落ち着いたのだが――梅雨時から初秋までは客足が遠のく温泉地としては、週刊誌様々といったところか。

梢枝は朝から晩まで予約がいっぱい。他の湯女も繁忙期さながらの忙しさだったが。

珠代はともかく、当時の感覚では大年増のフミや京子をあてがわれた客が文句を言ったり、今でいうチェンジを求めたり。他の旅館が駅で捕まえた振りの客が、梢枝のいる湯ではないと知って鞍替えして来たり。

湯女全員から、梢枝は嫉妬されるようになっていった。

男に対しては奔放な梢枝だが、日常ではみずから進んで人と交わる性質（たち）ではない。仲居と湯女とでは棲む世界が違うと、どちらも思っている。そして湯女同士も――同病相憐れむといった雰囲気ではなかった。京子が梢枝の母と同年齢で、フミはさらに歳上。珠代と朋美は二十五と二十八で仲が良いが、梢枝はその二人とも年齢が懸け離れている。つまり、梢枝は孤立していた。

客の世話は輪番でも、赤バンドだけでなく青もせしめる梢枝は稼ぎが太い。しかも、客の人気が集中する。四人に、歳下の後輩を可愛がるという感情が生まれにくいのも道理だった。

週刊誌は、そういった下地を大きく膨らませる酵母の役目を果たしたといえなくもなかった。

――三畳の個室を荒らされたのが、嫌がらせの始まりだった。壁に掛けておいたよそ行きの服が、修繕のし様もないほどに切り裂かれ、化粧セットも持ち去られていた。さいわいに貯金通帳や判子までは盗まれていなかったし、棚に置いていた宝石箱の装飾品も手付かずだったけれど。だから、泥棒ではなく旅館の誰かのいやがらせだということは明白だった。

とうぜんだが、梢枝は被害を亭主と女将に訴えた。
「うちは小さいから、お客様が奥まで来られることもよくあるからねえ。あれ以来、一見のお客様も増えたことだし。部屋に錠前を付けてあげようか」
宿泊客の仕業ということにして丸く収めたい。しかも一見の客が増えたのは週刊誌のせいだから――梢枝にも非があるとほのめかしている。
梢枝は考えてみた。錠前をつけてもらっても、裸商売だから鍵を肌身離さず持っているわけにもいかない。かといって、数字合わせの錠前は簡単に破られる。００１から９９９までを試さなくても、回すときのかすかな手応えの違いでわかってしまう。同級生の男子が得意そうに実演しているのを見て、それを知っていた。
「人を見たら泥棒と思えなんていいますけど。お客様や旅館の皆さんを疑うなんて、心苦しいです」
断わった。貴重品だけでも預かってもらうということも考えたけれど。たとえば貯金通帳は月に何回も必要になる。そのたびに女将さんの手をわずらわせるのも申し訳ない。
梢枝は、意表を突いた『対策』をとった。部屋にいるときも十センチほど戸を開けておくが、不在のときは開けっ放しにしたのだった。部屋の前の廊下は、従業員が行き来する。他人が梢枝の部屋にいれば、必ず誰かに目撃されるだろう。もちろん、通帳は天井裏に隠したし、たたんで部屋の隅に積み重ねた布団の下に宝石箱は押し込んでおいた。
外出用の服は、新調しなかった。また切り裂かれたら大損だし、温泉街の中なら湯女のお仕着せでもそんなに不都合はない。『美人湯』の湯女は三人とも積極的にそうしているし、『仙寿庵』に二人だけいる湯女も、それとわかる格好で見知ったくらいだ。

奇策が功を奏したのか、二度と部屋を荒らされることはなかった。梢枝はますます――職場だけでなく街中でも奔放に振る舞い、客に注目されて大車輪で稼ぎ、性の愉悦も満喫していたのだが。

月が替わって学校が夏休みになると、例年ならどの旅館も閑古鳥がいっそうかまびすしくなる。暑いさ中に温泉でもないだろうし、家族持ちは家庭サービスを余儀なくされる。独身男性は――確実にやれる風俗よりも、素人女性をナンパするという困難に挑んで海へ繰り出す者も少なくない。

週刊誌の宣伝効果は薄れてきたが、梢枝を名指しで来る日帰り客は後を絶たなかった。そんな客でも、三時間も四時間も待たされるよりは、少々歳を食っていてもすぐに相手をしてくれる湯女で我慢する者が多いから――梢枝ひとりがてんてこ舞いであとの四人はお茶を引くという事態には至らなかったが。しかし、梢枝の荒稼ぎがいっそう目に付くようになったのも間違いなかった。

泊り客が少なくて、梢枝も含めて暇を持て余していた夜。

「ちょっと話がある。付き合ってもらうよ」

京子に呼び出されとき、これまでになかったことだから不安にはなったけれど、ネチネチと厭味を言われるくらいだろうと、まだ梢枝は高を括っていた。

入浴客がひとりもいない露天風呂へ連れ出されて、そこには他の三人の湯女が待っていた。腰に手拭いを巻いただけの、仕事姿だった。

「おまえも着物を脱げよ」

お仕着せの浴衣を引き剥がされると、下にはなにも着けていない。浴衣の下にごちゃごちゃ着込む不自然な装いが、むしろマナーとして定着するのは昭和五十年代以降のことだ。
「客が来るとまずいから、おまえの好きな場所へ行こうか」
マッサージ小屋の端の部屋へ押し込まれた。いちばん若い珠代が外で見張りに残ったが、それでも二畳間ほどの部屋に四人。梢枝を壁に押しつけて三人が取り囲む形になった。
「おまえ、わしらの忠告を鼻であしらうとは、いい度胸だね」
正面に立った京子が顔を近づけてくる。
「あの……意味がわかりません」
不意に京子が身を引いた。と同時に――バシン。
「きゃっ……！」
爆発するような頬の痛みに、梢枝がよろめいた。
「ざけんなよ。洗体のイチャツキもたいがいにしろと、何度も言ったよな。ここでのサービスも余計なことまでするなって、これも言ってるぜ」
心当たりが、まったく無いわけでもなかった。
「岩陰だって、気配は伝わってくるよ」
「赤二本だって願い下げって客もいるのに。梢枝ちゃんは、好き嫌いがないの？」
「逆洗体は、まあうちの専売特許てわけじゃあないけど」
「たんびに本気になったら身がもたないわよ」
かけ離れて若いのでからかわれているのだろうくらいにしか思わず、「はあい」とおざなりな返事で聞き流してきたのだが。

かなり険悪な雰囲気ではあったが。土下座くらいはして「これからは気をつけます、ごめんなさい」と卑屈になれば、平穏に治まっていたかもしれない。けれど。自分はなにも悪いことはしていない――青臭い正義感、あるいは自己主張が、梢枝の対応を誤らせた。いくら最年少とはいえ自分が一番の稼ぎ頭だし、週刊誌の記事が評判になって温泉郷全体が潤ったのも、自分の功績だという気持ちもあった。取材を受けたのがフミさんだったりしたら、この二か月間の盛況はなかっただろう。

「あたし、誰にも迷惑を掛けてません。女将さんだって、何も言わないじゃないですか」

京子が、またビンタを張ろうとした。それを予期していた梢枝は、ただかわすのではなく左の腕で弾き返した。

「てめえ……生意気にも程があるよ」

梢枝をにらみつけて、ふいっと部屋を出て行った。

「梢枝ちゃん。今のは、あなたが悪いわよ」

フミの声は柔らかかったが、それを聞き分けられるほど梢枝も冷静ではない。黙って立ち尽くしている。

京子はすぐに戻って来た。手桶に湯女の洗い道具を入れているように見えたのだが。

「言葉で駄目なら、身体に言い聞かせてやるよ」

ヤクザまがいの言葉を吐いて、梢枝を押し倒した。朋美も加勢する。

梢枝は逆らわなかった。抵抗しても、体格で勝る相手と二対一、フミも加われば三対一。そんなに酷いことはされないだろうとも思っている。女将さんに知られたら、叱られるのは四人だ。

「ふてぶてしいねえ。この期に及んでも知らん顔の半兵衛かい」
京子が手桶から剃刀を取り出した。浴場に備え付けのT字形安全剃刀だった。
「いやでも腰を隠すようにしてやるよ」
水で湿しもせずに、剃刀を股間にあてがった。
ザリッ、ザリッ……乱暴な手つきで淡い淫毛を刈り取っていく。
ときおり鋭い痛みが肌を奔って、そのときだけは顔をしかめる梢枝。しかし、これだけで済みそうだと見当をつけて――怯えは薄れていた。
こんなことくらいで負けるもんか。内心では、そんな決心を固めている。

翌日の洗体サービスで、梢枝は決意を実行に移した。腰を巻く手拭いは大きめなので、フミでも余裕でひと巻き、小柄で脂肪も薄い梢枝ならひと巻き半はできる。それを梢枝はわざと――前で結び合わせた。頭隠して尻隠さずの反対で、尻はきっちり包んで前は曝け出す珍妙な姿だった。こういった奇をてらった姿に男が興奮することを、四か月の体験から梢枝は学び取っている。
控室で一緒になったのは京子と珠代だった。京子は苦い顔でそっぽを向いたが、珠代は棚から手桶を取るときに梢枝に近づいてボソッと呟いた。
「あんまり突っ張ってると、昨日くらいじゃ済まなくなるよ。やめときなって」
年齢が（他の三人よりは）近いせいか、パンパン歴十年の辛酸をなめているせいか。彼女が梢枝にいくらかは味方してくれているらしいと、さすがに梢枝も気づいたのだが。
「あたしは黙っていますけど、女将さんにだって目はついてるんですから」

肌を傷つけられたりしたら、仕事はできない。亭主さんは頼りないけど、女将さんは黙っていないだろう。梢枝は黙っていても――剃刀傷の残る無毛の股間を、湯屋番の源三爺さんに見せつけているから、今日のうちにも女将さんの耳にはいる。そこからどうなるかは、梢枝の知ったことではない。前を曝け出したのは、そこまでの含みもあってのことだった。

客は梢枝の珍妙でエロチックな姿を見て、当然の反応を示した。

「こりゃまた、思いきった姿だな。なにか意味があるの？」

えへへと、梢枝は照れ隠しの笑いを作った。

「ほら。隠す物が無くなっちゃったから、これでいいかなって。もちろん、お客様へのサービスですよ。それとも、こんなんじゃ一人前の女と認めてくれないですか？」

「……あ、いや。これはこれで……へええ、こんなに丸みを帯びているのか」

飾り毛がなくなると、淫埠の曲線が強調されて見える。

「触ってみてもいいんですよ。ここにバンドを巻いてくださいね」

梢枝は立ち上がって、左足を客の膝頭に乗せた。こんな仕種は初めてだった。嫉妬でリンチされたくらいで、へこたれてたまるもんか。その思いが、これまでもじゅうぶんに奔放だった梢枝を、いっそう大胆に――淫放に振る舞わせている。

「ちゃっかりしてるな。これで、いいか？」

客は左手首から白バンドを一本だけ抜いて、梢枝の足首に通した。

「ありがとうございます」

最初から意味のなかった手拭いをほどいて、手桶に落とした。

客は気の利いた言葉を掛けるゆとりも失って、膝に乗っている梢枝の足首をつかんでいっそう引き寄せ、無毛の股間に指を這わせた。股間の奥よりは、無毛そのものに興味を惹かれている。

梢枝は客の好き勝手にさせながら、ちろっとあたりを見回した。洗い場の中ほどで洗体をしている京子は、客の股間をにらみつけて顔を上げようとしない。反対側の端にいる珠代とは、目が合った。あんたには負けたよ――表情がそう語っているように見えたのは、梢枝のひとり合点だったかもしれない。

フミが遅れて姿を現したのをきっかけに、梢枝は手順通りの洗体サービスを始めた。といっても、順番は違えている。最初に客の持ち物を洗いながら必要以上にしごいて、人目を気にして半勃ちだったのを巨木にまで育てあげた。

「このまま、ここで洗いますか。湯壺の裏だったら、二人きりになれるんですけど」

ねだるというほどのこともなく青バンドをせしめて、梢枝は岩山の陰に客を案内した。客は手拭いで前を隠していたが梢枝は、洗体用具を入れた手桶は客に持ってもらい、自分は水を張った湯桶を両手に持って、無毛の正面を堂々と曝して洗い場を闊歩した。

それだけでもじゅうぶん過ぎただろうが――わざわざ遠回りして京子の後ろを通ったのは、みずから災厄を招く行為だった。どうせたいしたことはできっこないし、じわじわくすぶっているよりは、いっそ火に油を注いでやれ。そんな気持ちが、たしかにあった。

岩山の陰で梢枝は、いつものように客に身体を洗って（弄られて）もらうのではなく、自分の身体を存分に使って洗体をした。股間をこすりつけると、これまでは淫毛がクッションになっていた部分も直接に客の肌と密着して、くすぐったくておしっこをちびりそう

になるような快感だった。
「うあああ……す、すご……」
客の身体をオナニーの道具に使っているようなものだったが。別に苦情は言われなかった。
マッサージ室では、三か月ぶりくらいだろうか。口をふさがずに、思う存分に嬌声を吐き散らかした。梢枝は、自分の声が自分も客もいっそう興奮させるということを初めて知ったのだった。
「これだけ残していてもしょうがいないから、全部あげるよ」
残っていた白バンド四本もくれた。すでに金銭感覚が狂っている梢枝にすればわずか二百円だが、サービスを終えてから心付をもらうなんて、滅多にないことだった。
その日は夕方までにあと三人を受け持った。そして夜は、昨日に続いて梢枝も含めて全員がお茶を引いた。
――当然だが、再び梢枝はリンチの場に引き据えられた。梢枝は昨日と同じ全裸に剥かれたが、他の湯女はお仕着せの浴衣を着ている。
「今日の態度は、どういうことだよ」
「わしらへの当て付けかい」
「梢枝ちゃん。さすがに、今日のはやり過ぎよ。女将さんにも言われたわ」
昨日は傍観していたフミも、京子と朋美の側についた。珠代は――マッサージ室の外で見張り番という形で逃げている。
「こんな夏枯れ時に十七人もお客が来るなんて、例年にはないことだって、亭主さんも喜

んでらしたじゃないですか。週刊誌の御利益だって。皆さんだって、たくさん稼げたじゃないですか」

先輩を立てて先輩の言葉に従っていればいいなんて、昔の封建主義だ。あたしがいちばん稼いでいるんだ。出る杭は打たれるっていうけれど、押しも押されもしないくらいの太い杭になってやれ。そんな思いが、梢枝の中にはあった。

「荒稼ぎは、長い目で見ると損なのよ。建前は建前としても、法の抜け穴をくぐっていることに違いはないんだから」

あまり評判になると取り締まられる。フミは女将の言葉を代弁しているのだと、梢枝にもわかる。けれど――そうなってもかまわないと思っている。

自分から辞めるとなると支度金の五万円を返さなければならないけど、旅館の側で湯女を廃止するんなら、退職金代わりだ。無駄遣いもしたけれど、物価の高い都会でも女ひとりなら一年くらいは楽に暮らせるだけの貯金がある。珠代さんを頼れば、いくらでもパンパン娼売の口はあるだろう。就職相談会のときに即日採用社の課長さんが言っていたトルコ風呂というもの、面白そうだ。

そういった思いは、すこしずつ梢枝の中に沈殿していたのだろう。それが、一気に浮かび上がってきた。

「おまえな。開き直ってるつもりかしらんが――小娘の勝手放題が通用するほど、世の中は甘くないんだよ」

京子の顔が、昨日とは違ってどす赤く染まっている。

肩に手を掛けられて、梢枝はびくっと身を引いた。が、後ろはすぐ壁だから逃げられな

い。結局はその場に押し倒されたのだが――昨日みたいに平然とはしていられなかった。毛を剃られてしまって、あとは痣が目立たない程度に殴る蹴るが関の山だろうと思っていたのだが。考え違いをしていたのかもしれないと不安になった。

果たして。京子は手桶に掛けていた手拭いを剥いで、擂粉木のような物を取り出した。

ひぐっ……と、梢枝は息を詰まらせた。擂粉木だとしても、家庭の台所用品ではない。直径は六センチもあるだろうか。全体が黒ずんでいる。この旅館の厨房で長年使われてきたものかもしれない。しかし、もう擂粉木には使えないだろう。何か所にも切れ目が入れられて、そこが棘のようにささくれている。

「毛を剃っても堪えなかったようだが、道具が傷ついたら、しばらくはおとなしくするしかないよねえ」

京子が後ろ向きになって梢枝の腰に尻を落とした。

グリッ……文字通りの巨木に股間をえぐられる。

「やめてください。ほんとに怪我しちゃいます」

梢枝は身を起こして目の前の広い背中を突きのけようとしたが、朋美に押さえ付けられた。

「昨日は毛が無いようにしてやって効き目がなかったから、今日は怪我あるようにしてやるのさ」

朋美が真顔でくだらない冗談を言う。

ギチチッ……乾ききった穴に、巨木が無理矢理に押し入ってくる。

「ぎゃあああっ……痛い！　痛い！　やめて！」

破瓜の瞬間を含めて女性器に激しい痛みを受けたことのない梢枝には、生きながらに生皮を剥がれるどころか、鋸で引き裂かれているのではないかと疑うほどの激痛だった。
ゴリゴリグリグリと擂粉木が奥まで押し込まれる。奥に突き当たるのを梢枝は感じた。
すごく痛かったけれど、喉元過ぎれば熱さを忘れる――わけにはいかなかった。むしろ、ここからがリンチの真骨頂だった。
グリンと、擂粉木がひねられた。そして
「がはっ……！」
さっきの激痛とは比べものにならない、太くて鋭い激越な痛みが膣内で爆発した。
「……！」
梢枝は口を大きく開けて、しかし凄絶な激痛で悲鳴を吐き出せない。
擂粉木が左右にねじられながら、ゆっくりと引き抜かれていく。ささくれが逆立って、粘膜を掻き毟っている。その下層の筋肉まで傷つけているかもしれない。
抜き取られた擂粉木は、鮮血に染まっていた。
「これでしばらくは、いやでもおとなしくしてなきゃならないだろうね」
三人は梢枝をうっちゃって引き上げて行った。
「珠代も来いよ」
京子の声がドアの外に聞こえた。
四人の気配が消えて三十分ほども、梢枝はあお向けに倒れたままの姿でいた。それから、のろのろと立ち上がって――備え付けの落とし紙で何度も股間を拭った。いくら拭っても血が止まらないので、最後には何枚も丸めて穴に詰めて――浴衣を汚すのも癪だったので

手に持って、素裸で自分の部屋まで戻った。途中で誰かに見られたかもしれないが、覚えてはいなかった。それでも。梢枝の頬は最後まで乾いていた。

負けるもんか、負けるもんか。そんな言葉を、声に出してつぶやいていたかもしれない。

辺鄙な温泉郷に診療所はひとつしかない。初老の男性が医師で奥さんが薬剤師。看護婦は娘さん。ここで診てもらうと、明日のうちに梢枝の噂が広まってしまう。同情されるか、自業自得と嘲笑われるか――憐れまれるのは厭だし、蔑まれるのはもっと厭だ。一時間ほどで出血は止まったし、指を挿れて探った感じでは、そんなにひどく傷ついているようにも思えなかった。さらに一時間も経つと、痛みもあまり気にならないくらいまで鎮まって――梢枝は、そのまま眠りに落ちた。

そして翌朝。梢枝はケロリとした顔で起き出して、厨房の隅にある従業員用の食卓で朝ご飯もふつうに食べた。京子がその場に居合わせて、さすがにこれは挨拶もせず無視してかかるしかなかった。

「すこし調子が良くないので、雑用のお手伝いは休ませてください。でも、洗体のお仕事はちゃんとしますから」

梢枝の申し出に、女将は驚いた顔をした。昨夜の出来事を知っているのだろう。

「無理はしなくてもいいよ。ここしばらく手が空いているのだから」

「平気です。マッサージも、ちゃんとやりますから」

梢枝は意識して、会話を噛み合わさなかった。

「わかったわ。今日の輪番に入れるよう、源三さんに言っておきます」

本人が触れようとしないのだから、自分のほうから根掘り葉掘りすることもない――女将は、そうとでも考えたのだろう。
帰る前にもう一戦という泊り客はいなかったが、十時半に三人の日帰り客が訪れて湯女の出番になった。三人のうちの一人が梢枝を指名して、あとの二人は朋美と珠代が受け持った。京子はリンチの首謀者だし、フミは梢枝と並べると親子ほども歳がはなれている。女将の意を汲んだ源三の采配だろう。
梢枝は客を岩山の裏へ誘ったりはせず、洗い場でおとなしく洗体サービスを済ませた。指一本ならともかく、二本三本と挿れると、はっきり痛みがあった。指先に血も着いた。とてもマッサージ室での自由恋愛などできる状態ではないのだが。
「昨日から、血が出ているんです」
梢枝がそう言うと、客は当然の解釈をして顔をしかめた。
「話が違うじゃないか。ここまで連れ込んで、トルコみたいな真似で誤魔化そうってのか」
トルコ風呂でのサービスは、まだスペシャルかせいぜいダブルまでの店も多い。スペシャルは手による一方的な処理で、ダブルは女性へのタッチや指挿れも許される。
梢枝は黙って男の前にひざまずいて――萎びかけている肉棒を口に咥えた。
「お……そうきたか……くうう、たまらん」
肉茎に舌を絡めてしゃぶり、ずぞぞぞっと吸い込み、亀頭を甘噛みする。四か月のあいだに、梢枝はさまざまなテクニックを自得していた。
たちまち、しなやかな若木がごつごつした巨木にまで成長する。そのまま埒を明けさせても客は文句を言わないかもしれないが。災い転じて福と為す――梢枝は冒険の決心をし

ていた。
「このまま出してもらっても、あたしは構わないんですけど……女の子のお釜を掘ってみませんか？」
さすがに口ごもってしまった。
「はあ……ああ、そういうことか。しかし、血まみれは御免だが……糞まみれは、もっとなあ」
結局、その客には口で埒を明けてもらったのだが。むしろ、ふつうに交わるよりも感激してもらえた。吐き出さずに飲み込むと、客はいっそう驚いた。
「平気なのか、汚いぞ」
それは、男女を問わず当時のまっとうな感覚だろう。けれど梢枝は、若くして性の世界に足を踏み入れ堅気の娘とは比較にならないほどの経験を積んではいるが、むしろそれゆえに、世間一般の禁忌を学んではいなかった。どころか、それは飲み込むものだと継父から仕込まれてさえいる。
「汚くなんか、ないですよ。だって、赤ちゃんの種ですよ。命をまるごともらったんだから、あたしが感謝しなくちゃならないくらいです。あ、バンドはお返ししませんよ」
真面目くさって答える梢枝に、客は苦笑するしかない。ともかくも。自分の出したものを飲んでくれた娘に悪感情を持つはずもなかった。心付まではくれなかったけれど。
――お釜については客の忌避も当然と考えて、梢枝はさらに工夫を凝らした。せっかくの決心を空回りに終わらせたくなかった。客の目に見えない物陰に行って、マッサージ室洗浄用のゴムホースを肛門にあてがって、水を注入した。腹がグルグルうなるのを我慢し

て便所へ駆けこんで――自分の跡始末よりも、飛び散った汚水の処理に時間を費やしてしまった。

そして、つぎの客を迎えたのだが。

「よせやい。半日もかけて出張ってきて、なにが悲しゅうてホモの真似をせにゃならんのだ」

その日は三人を相手に、すべてフェラチオで済ませた。

考えてみれば――変態的な要求をする客は、せいぜい二十人か三十人に一人くらいだ。釜を掘らせろなんて客は、これまでに十人くらいしかいなかった。この四か月で一日平均五人を相手にしてきたとして、延べで五百人。梢枝から持ち掛けても、応じてくれる客は十人に一人もいないだろう。

梢枝としては複雑な心持ちではあった。使える場所は三か所あるのだから、すべて使ってみたいという思いもあるが。立て続けに拒まれてみると、一か所くらいは未踏の地を残しておいてもいいかなという気にもなってきた。

もっとも。そこを使う客が多かったとしたら――ささくれた擂粉木をそこにまで突っ込まれていたかもしれない。そうなると排便に支障をきたしてしまう。

そうならなかったのだから、結果としては良かったのだろう。

娼売道具を傷つけられてもへこたれない梢枝に、京子も朋美も毒気を抜かれてしまった感があった。三度目のリンチはなかった。そして、部屋を荒らされることもなかった。不在のときに部屋を開けっ放しにしておくという奇策が功を奏したのだろう。切り裂いてや

る衣服は無いし、隠してある貴重品を探すのには時間がかかる。その間に誰かが通りすがればアウトだ。かといって部屋を閉ざしても――梢枝は在室中も隙間を残しておくのだから、不審に思われるに決まっている。

梢枝は「勝った」と思っていたのではなかろうか。京子と朋美とは冷たい反目が尾を引いていたが――梢枝が屈していないからこその反目である。フミは最年長の、いわばまとめ役であり、どちらかの肩を持つわけにもいかない。そして珠代は、表立って梢枝の肩を持ったりはしないが、少なくとも敵ではなかった。

梢枝はもともと、女の子同士で群れる性質でもないし、先輩に取り入ろうとか可愛がられようとも思っていない。それだけの処世術を身に着けるには、まだ若過ぎたともいえるのだが。すこしだけ居心地の悪さを感じながらも、相変わらず梢枝は奔放に振る舞って荒稼ぎを続けていった。

淫惨な仕置

秋になって客足が戻り、湯女も大車輪。といっても、ひとり一時間の接客だから、一日でせいぜい八人くらいだが。それでも、一時間に四人から五人の湯女が帳場に出入りしてバンドの清算をするのだから、にぎやかで艶やかな光景ではあった。

そんな忙しい一日が終わったある日。

火を落として静まり返った厨房に、亭主と女将が五人の湯女を呼び集めた。
「大変に困った問題が起きました」
五人を壁際にならんで座らせて、亭主がその前に立って腕を組む。
「ゴムバンドの帳尻が合わないのですよ」
客は旅館に金を預けて、預かり証の代わりにゴムバンドを受け取る。客が後でゴムバンドを戻せば、旅館は預り金を返す。旅館側のあずかり知らぬ事情で湯女がゴムバンドを持ち込めば、半額で引き取る。客と湯女との間で現金授受は行なわれていないという、法の網を潜り抜けるための方便であると同時に、湯女に勝手な値段交渉をさせない意味もあるのだが。結果として旅館側には、湯女に払ったのと同じ金額が残る。
それが四百五十円足りないというのだった。
「お客がよそからゴムバンドを持ち込んだんじゃないですか」
京子の当てずっぽうには無理があると、梢枝にもわかっている。ゴムバンドには、旅館ごとの刻印を捺した一センチ角のゴムが接着されている。もっとありそうなのは――帳場からゴムバンドを盗み出して、知らん顔で換金するという手口だ。
「本来なら、ちょろまかした人だけを呼びつけて、内々に済ませるところですがね。それでは、ますます当人を付け上がらせるだけだと思って、集まってもらったのです」
亭主の視線が自分に向けられていると、梢枝は気づいた。
「今日のお客様は三十八人で、帳面に付けている赤バンドの出入りも三十八本。皆さん、お盛んなことですね。問題は白バンドと青バンドです。これは、ほとんどが梢枝の持ち込みだね」

疑われている――いや、決めつけられていると梢枝は気づいた。亭主にしろ女将にしろ、湯女を呼び捨てにすることは、ほとんどない。
「あたし、ちゃんとお客からもらっています」
「梢枝は今日、青バンドを六本換金しているが、お客様から返還が無かったのは三本だけ。一本百五十円だから、辻褄の合わない三本分でちょうど四百五十円だね」
濡れ衣、それとも言いがかり。今日は九人の洗体で、六人を岩山の裏へ誘い込んでいる。
「あたし、ちゃんと六人のお客から青バンドをもらいました」
「しかし、青バンドを持ち込んだのは梢枝だけだからね。言い逃れはできないよ」
「そんな……」
なんだって、急にこんなことを――そこで、ふと気づいた。さっきの京子の言葉。なんだか、狂言回しみたいだった。
ここ一か月ほど、梢枝とほかの湯女との間には、ぎくしゃくした反目が続いている。接客はもちろん、旅館にも迷惑を掛けていないと思っていたけれど。小さな世界の中では、どんな小さな不協和音でも耳障りなのかもしれない。
もちろん。亭主さんはともかく、女将さんに注意されたら素直に聞き入れていただろうけれど――そうは思われていなかったのだろうか。もしかしたら。梢枝の過剰なお色気サービスが客を呼んでいた一面はある。あまりおとなしくされても、旅館としては痛し痒しなのだ。といって、反目を放置もできない。
だから、まったく別の口実でお灸を据えておこう――とでも、考えたのだろうか。
「素直に罪を認めるなら、事を荒立てたりせずに内々で済ませてあげる」

「あんたのしたことは、立派な犯罪なんだよ」
京子の口出しで、梢枝は推測が間違っていないと確信した。
してもいないことを認めるのは厭だ。事を荒立てるのなら、そうしてください。警察に届ければ、実際には旅館が湯女に売春をさせていたことが公になって、困るのはそちらじゃないんですか。そういうふうに反論も出来たけれど。同輩はともかく、雇い主を敵にまわしたら困るのは梢枝だ。梢枝のおかげで繁昌しているのは事実だが、梢枝が来る前から温泉郷はそれなりにまわっていたのだ。
あっさりと首にされるかもしれないと、初めて梢枝は思い至った。そのときには、支度金の五万円を返せと言われるだろう。店の都合で首を切るんだから返さなくてもいいように思うけれど。貯金通帳を取り上げられて、身ひとつで追い出されたら――そこまで先走って考えてしまった。
旅館や先輩の理不尽な仕打ちに屈するのは厭だけど、尻尾を巻いて実家に逃げ戻るのは、もっと厭だ。
「あたし……してもいない罪を認めるなんて、絶対にしません」
それは反発ではなかった。
「だから、好きなようにしてください」
首を切られるというのは考えすぎだろうと、思い直した。四百五十円を弁償させられたって蚊に刺されたほどの痛みにもならない。謹慎なんか、一週間でも一か月でも骨休めみたいなもの。どうせ旅館だって、出るところには出られない事情を抱えている。
まさか、寄ってたかってのリンチもできないだろうと――これまでと同じに高を括った

のだが。
「まったく、ふてぶてしい子だね。しばらくは、おいたも出来ないくらいには懲らしめてやらなくちゃ」
それまでは亭主に仕切らせていた女将が、梢枝の前に立った。
「それじゃ、好きにさせてもらうよ。着物を脱ぎなさい」
梢枝は女将の顔をまっすぐに見上げて――立ち上がった。お仕着せの浴衣を黙って脱ぐ。みんな、女将さんにつくに決まっている。五対一では、逆らうだけ無駄だ。
「そこへあお向けに押さえ付けておきなさい」
梢枝は、それにも逆らわなかった。けれど、内心では意外な成り行きに怯えている。毛を剃られたり擂粉木を突っ込まれるだけでは済まない。そう覚悟させられるほど、女将の顔は冷たかった。
女将は黙って場をはなれて、すぐに戻って来た。小道具を幾つか抱えている。
「一か月でだいぶに伸びてきたね。あんた、剃ってやって」
梢枝は脚を大きく開かせられた。その中に、亭主が剃刀を持って座る。
「これくらいじゃ懲りないとわかってるだろうに」
女将に向けて言った言葉だが、顔は梢枝の股間に向けたままだった。
この人の顔、助平になってる――梢枝は、男の心裡を見抜いた。憎しみや嫉妬で剃られるよりは、女として救われる思いが湧いた。身体が目当てなんて台詞はよく聞くけれど、末永く添い遂げるわけでもない仮初めの男女の間に、ほかの何があるんだろう。
六人の女の視線から逃れたくて、梢枝は目をつむって亭主の仕打ちを受け容れた。

じきに剃り終わって――亭主に変わって女将が、梢枝の股座近くに座った。
「おまえはね、ここが気持ち良すぎてアレコレしてるんだろうね。しばらくは、自分で触ることもできなくしてあげるよ」
襞の間に埋もれている肉蕾をほじくり出された。
女将は包皮をつまんでしごき、淫核を硬くしこらせる。言っていることとしていることが反対――とは、梢枝の思い違いだった。女将は包皮を剥いて、実核を露出させた。それを左手で押さえておいて、右手は小箱を開けて茶色い綿のような物を指につまんだ。
「あ……？！」
戦後になって廃れてきたとはいえ、まだまだお灸は庶民の中に根付いている。肩凝りや腰痛の民間療法でもあるし、寝小便の特効薬という迷信も生きている。そして、子供への折檻にも使われている。
ものの譬えではなく、まさしくお灸を据えられるわけだが――どこに据えられるかは、こうなってみると明白だった。そっと触ればすごく気持ちいいけれど、それだけ敏感なのだから、お灸を据えられたらどうなるか。
「ごめんなさい。もう、二度としません。だから、赦してください」
それまでとは打って変わって、梢枝は半泣きの声で訴えた。
「二度としませんって、何をだね？」
返しながら、女将は艾（もぐさ）を練る指を休めない。
「……」
梢枝は言葉に詰まった。四百五十円は口実だと、すでに梢枝は悟っている。濡れ衣なの

だから、二度でも三度でも着せることができるだろう。マッサージ室での自由恋愛は、これをやめろとは女将も言っていない。そんなことをすれば、『湯乃華』に閑古鳥が鳴く。

「もう……お客さんを裏に誘い込んだりはしません。マッサージ室でも、おとなしくします」

「動かないように、もっと強く押さえて。フミさんも手伝いなさい」

両手を頭上に伸ばした形にされてフミに手首をつかまれ、京子と朋美は片手で腰を押さえて片手は膝をつかんで閉じないようにした。

「珠代ちゃんも。あなたは馬乗りになりなさい。この期に及んで同情なんか駄目よ」

ごめんねと囁いてから、珠代も梢枝を虐める側に加わった。

実核がさらに引き伸ばされて、根元を女将の指が押さえつける。梢枝には珠代の身体に遮られて見えていないが、そこに据えられた艾は、実核と同じくらいの大きさがあった。

亭主が線香に火を点けて女将に手渡した。そして、脇に控えて――梢枝の股間を見詰めている。

剃られたときと同じで、梢枝には亭主の存在が、せめてもの心のよりどころに思えた。こんな酷いことをされても、それを見て興奮してくれる男がいるのなら、同性にどんなに憎まれてもすこしは救いがある。

いよいよ火が点じられたらしい。珠代の肩越しに薄い煙が立ちのぼった。

「くううう……」

最初に灸を据えられる熱痛を『皮切り』というが、それどころではない。熱の錐が実核を貫き通している。しかも、錐はだんだん太く鋭くなって……

「うああ……熱い！　痛い！　赦して……赦してください」
「うるさいね」
不意に女将が立ち上がった。着物の裾を端折り腰巻もたくし上げて、珠代と背中合わせになって梢枝の顔に尻を落とした。
「んぶうう……」
口をふさがれて、梢枝は悲鳴を封じられた。淫毛がじゃりじゃりと鼻腔をくすぐるが、それを不快に思うどころではない。このままではクリトリスが焼け落ちてしまうのではないか――そう思ったとき、この折檻の残酷さを梢枝は知った。
クリトリスが無くなったところで、男の側にはたいして不都合はないのだ。湯女として働くことはできる。擂粉木で傷つけるよりも、旅館としてはよほど都合がよい。
そして、梢枝は快楽を取り上げられてしまう。そうなってまで、客に過剰なサービスをする気にはなれないだろう。洗体とマッサージで三百五十円。青バンド百五十円のためだけに、傷ついたクリトリス（それとも、クリトリスのあったところ？）を弄ばれる苦痛には耐えられない。
「むぶうううううっ……ぅぅぅぅ！」
三人がかりで押さえ付けられている腰が、ビクンビクンと跳ねる。
「おっとっと……」
京子が腰を押さえていた手をずらして、転げ落ちかけた艾を据え直した。
「おお、熱かった」
声が楽しそうに弾んでいる。

――艾は最後までクリトリスの上で燃え尽くした。
「わたくしだって、いよいよとなれば鬼にでも夜叉にでもなりますからね」
そう言って女将は梢枝の顔から立ち上がった。梢枝にだけでなく、他の湯女にも向けられた言葉だった。

翌日も、梢枝は仕事をした。火傷が治るまで休んでいたかったけれど、女将は擂粉木のときも休まずに働いたことを持ち出して、許してくれなかった。もっと辛いことを命じられたとしても、梢枝は女将の言葉に従っていただろう。それほどに、灸折檻の効き目は著しかった。
さいわいに焼けて無くなりはしなかったが。火傷で親指の先ほどにも膨れて包皮では蔽いきれなくなり、常に先端が露出するようになった。いっそ剥きっ放しにしておこうかと思ったが、それでは湯が沁みて立っていられないほどに痛む。
梢枝は手拭いで厳重に股間を隠して、客から身を引くようにして身体を洗った。マッサージ室では、官能を追求するどころではない。腰を打ちつけられるたびにクリトリスが悲鳴をあげて――快感の無い娼売の辛さを思い知らされたのだった。
敏感な部位だけに、治りも早いのだろう。一週間もすると薄皮が張って、痛みも少なくなった。しかし、元の形には戻りそうもなかった。火傷の部分が盛り上がってきて、クリトリス全体が以前の倍ほどにも大きくなり、常に半分は露出する形になった。そして盛り上がった部分はあまり感じなくなったのに、その周辺はずっと鋭敏になってしまった。だからというべきか、しかしというべきか――梢枝はマッサージ室でもそこを刺激しないよ

うに努めるしかなかった。外にまで聞こえる嬌声を張り上げたら、今度はもっとひどい折檻をされるかもしれない。かといって、みずから猿轡を噛んでまで快楽を追求する気にもなれない。やはり、もしも露見したらという怯えが、梢枝を縛っていた。

梢枝がおとなしくなって、湯女のあいだの力関係は変わった。うんと歳の離れた味噌っかすという扱いに、梢枝は甘んじるしかなくなった。ある意味、それが本来の形であったかもしれない。

梢枝の過剰サービスがなくなると、日帰りの入浴客も以前の数にまで漸減して、温泉郷全体も落ち着いてきたのだが。活況を知った後になってみると、寂れてきた感じは否めなかった。

そのまま二年三年と過ぎていけば、梢枝への扱いもだんだんと変わって、梢枝も他の四人と変わらない娼売女へと落ち着いて行ったのだろうが。

母親も湯女

歳が明けてしばらくすると、『湯乃華』にもう一人、新しい湯女が加わった。

「母さん……！」

いちばん驚いたのは梢枝だった。

後添いの夫を独り占めするために実の娘を湯女に売った母親が、いわば娘を頼る形で零

落してきたのだった。
「あの五万円が失敗だったよ」
母が自嘲した。
将来の改築に備えた資金のはずだったが、今すぐに改築しても不都合はない。梅雨明けに改築して、間口が広がったぶんだけ、扱い品目も増やした。それは図に当たったのだが、母ひとりでは人手が足りずに行かず後家の娘を雇った。連れ子にまで手を出した男なのだから、女房よりも若くて熟れきった女に手を出さないはずがない。そして、母は追い出されてしまったのだった。慰謝料がどうこうの時代ではない。たちまち、生活に困った。せめてもの救いなのか、悲劇の上塗りなのか、息子は跡取りということで男の手元に残されたのだが――新しい女に子供ができたら、どうなるかわかったものでもない。
いよいよのときは子供を引き取って暮らすことになるが、離婚歴のある三十過ぎの女を雇ってくれるところはなかった。
母が最期に頼ったのは例の即日採用社だった。紹介されたのは、大年増でも務まるいかがわしい仕事ばかり。そのひとつが湯女だった。今さらどの面さげて――という思いもあったが、息子を取られて最後に残った身内という思いも強かった。まったく右も左もわからない娼売でも実の娘と一緒なら、羞ずかしさはひとしおだが心強くもある。
旅館のほうも、実の親子がそろって湯女というのは『仙寿庵』にも『美人湯』にもないセールスポイントになるだろうと、求人年齢よりもずっと歳を食った女性を雇うのに躊躇はしなかった。
そういう次第だった。

「でも、驚いた。わたしがいちばんのオバアチャンだろうと覚悟してたのに、フミさんなんて五つも歳上なのねえ」
母は京子と同い歳だった。
そう気づいた途端。梢枝の中にしたたかな計算が生まれた。珠代さんは味方じゃないけれど表立った敵でもない。フミさんは、最年長でまとめ役を任じている。梢枝を目の敵にしているのは京子と朋美だ。女将さんまで加えて五対一に見えるけれど、実質的には二対一だった。そこに母が加われば――二対二で引けはとらない。母には娘を湯女に売ったという引け目があるだろうし、なんといっても血を分けた仲だ。梢枝が淫放に振る舞っても肩を持ってくれるに決まっている。
「それじゃあね。お亭主さんから話は聞いてるでしょうけど、裏の事情も含めて、あたしが教えてあげるね」
まだなにも変わってはいないのに――梢枝は新天地が拓けた気分になって、ずっと歳上の後輩に向かって教育を始めるのだった。

湯女：完

http://goumonchoukyou.blog.fc2.com/